

冠菊 純魯

全

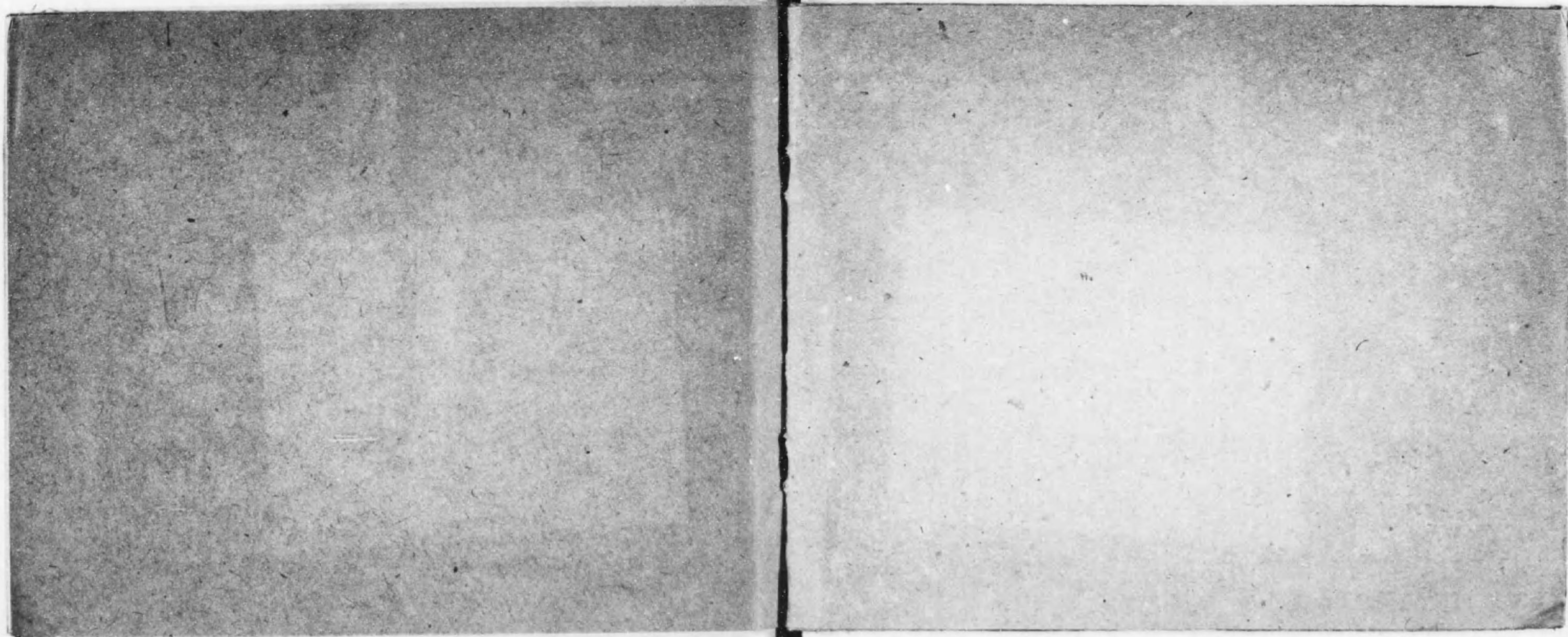
特 110
145



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





行110
145

紀念 冠句菊乃香 目次

※ い(ゐ)之部 ※

命が延び

稻荷ひ

因縁じや

色と慾

一ツ派たて

いきくくと

いやでも應でも

今はゆめ

今の間に

世にけり

二争ひ

※ ろ之部 ※

六歌仙

ろくしがに

老人が直打

蠟燭消し

労働は某

勞した功

大根清淨

露路から

老人厭ひ

老生不生

ろくにきかす

※ は之部 ※

花じやぐ

花が散り

はり込で

半分泣顔

這入りかね

這入りにくい

母一人り

花が咲き

春になり

はゝんなる程

花かたじや

はんなりと



大正
5. 10. 24
内交

目次

一

はるくくと

※ に 之 部 ※

日本よろし

二度とない

にらみつけられ

にくい

西も東も

西から日の出

二三日

人氣よし

二軒から

※ ほ 之 部 ※

保存して

帆を上げて

ほそい

ほかになし

ほんのりと

ほつとして

本望遂げ

譽られて

※ へ 之 部 ※

下手じやく

へばりつき

變ん屈つらしい

絲爪でくらし

返事がよい

へつこんで

便利な世

別條なし

※ こ 之 部 ※

所柄らとて

遠からぬ

突然んと

とづくに見て

どうよくな

とても

年々に

飛び上り

そろけてる

※ ち 之 部 ※

ちんば引

近い

ちから一ぱい

珍ん無類

智恵絞り

ちつた

千鳥足

乳呑み子抱き

近頃出来

※ り 之 部 ※

隣家から

兩方から

格氣せぬ

臨時

流義出し

利用して

格氣もよし

理は有れど

兩手くみ

※ ぬ 之 部 ※

抜いた

抜けつかくれつ

ぬからぬ奴

暖かい

盗人の朝寝

塗りもの

ぬる

盗まれて

ぬき足さし足

抜けて居る

※ る 之 部 ※

類いは友

留まながら

類いの中

るすでもよい
留主遣かひ

流勞して
類いの中から

るす事に

※を(お)之部※

をつとごつこい
をい／＼と
おゝ怖わや
をしまれて
おゝ嬉し

をとなし
起してやり
おびたいしい
をしい事

追まわし
思ひの外か
惜しいけれど
大きいな

※わ之部※

わたつた／＼
若葉見て
割つては言へぬ
若い中から

譯けが聞きたい
忘られぬ
薬で拭き
忘れてならぬ

若い／＼
わざ／＼と
和合して
笑らい／＼

※か之部※

かれこれと
考へて
かなめ

感心じや
疝癪起こし
かゆい／＼

加減んがよい
可愛がり
覺悟して

冠つて見て

神の徳

敷を重ねて

※よ之部※

よしや又
涎れ垂れ
用意がたらぬ
餘所事に
夜通しに

よかろ／＼
夜も晝も
慾
洋行して

夜が明けて
よろこんで
嫁連て
嫁が來て

※た之部※

欺まされて
頼みに思ひ
たのみます
袂を調べ
たいて居る

樂しみて
誕生まします
大事にして
叩いてる

短氣／＼
立板に水
高い／＼
たいそうな

※れ之部※

禮義正しう
列を作り
禮も言わす

禮に及ばぬ
禮がたら
例の通り

連帶して
冷淡な
歴然と

禮参り

そ之部

空晴れて 其の通り 算盤持
 空向いて 其の手はくわぬ そわくど
 そよこしい そくさいな そしらぬ顔

つ之部

月がよい つんとして 月
 月に二三度 つらい役 謹しみて
 辻に立 月にむら雲 連れが出来

ね之部

ねんごろに 願ひが叶ひ 念いれて
 年忌が廻り 直が出来て 寝られんく
 規らい通り

な之部

なりません なるよふにして 馴染みがより
 眺められ なさけない 何事も

ら之部

来客く ラムネ呑む 樂な事
 樂は苦 落第して 樂観んく
 樂人んじや 樂でない 嵐山
 欄かんにもたれ 亂法な 亂さわぎ

む之部

睦つましい 無理言ふて 結びつけ
 結すんでる むつくりと むりから
 無念んはらし

う之部

うるさいけれど うつり變り 運が強い
 嘘も程らい 嬉れしいく 美しくい
 うろくくと 浮世はゆめ

の之部

延び上がり のろけ 呑んで来て

軒下たに
延びちりみ
軒に立ち

野越へ山越へ
野も山も
のんざりと

のぶとい奴つ
呑むに呑れぬ

※ く 之 部 ※

雲に入り
首
嗅いなあ
喰い附いて

曇り勝ち
喰らひぬけ
屎喰らへ
國のため

くるしまぎれ
艸苺り女
薬り

※ や 之 部 ※

やつしてる
安い事
やらかいなあ
山へ登り

やくだい
やいて居る
やたて出し

やつぱりそうか
やすくと
山越へて

※ ま 之 部 ※

迷ひが晴れ
迷ふてる
待てくく

幕が明き
真似でけぬ
參つて居ります

松
待つて居られん
先づく是れへ

※ け 之 部 ※

まいて居る
検査濟み
今日は吉
けしからぬ

景色見て
結構な

煙むたいく
決心して

※ ふ 之 部 ※

不仕合せ
福は外と
蒲團出し

船に乗り
殖へて来た
冬になり

伏し拜がみ
普請して
富士が見へ

※ こ 之 部 ※

頃もよし
轉ろがして
極く楽しくや

是見よがし
こそばい
こりたく

御もつとも
こゑがよい
ごまかして

※ え(る)之 部 ※

回向して
永代残り

縁んじやなあ
得手に帆

笑み含くみ
書にも書かれぬ

遠慮して

ゑらいく

江の眺がめ

※ て 之 部 ※

敵きがない

手間入れ損ん

手柄らして

天の興たへ

手を廣げ

てんど隙ま

天の助け

手習らひに

亭主に別かれ

※ あ 之 部 ※

あきれてる

合性よし

穴賢こ

秋らしい

怪やしいなあ

歩行きごをし

新らしい

あほらしい

あつくろしい

姉だより

赤かいく

あわよくは

※ さ 之 部 ※

盛りじやな

坂登り

さあそこじや

さよふか

さすがく

差しつかへ

寒いく

咲き揃ひ

※ き 之 部 ※

きのふけふ

聞きわけて

機嫌んよふ

木が太り

器量見込み

きこゑたく

きたぞく

氣儘くらし

氣さんじな

きつしりと

きみがわるい

※ ゆ 之 部 ※

雪が降り

愉快じやなあ

油断大敵

ゆめではないか

ゆり起こし

ゆつくりと

優美な事

浴衣着て

湯がぬるい

夕暮れに

祝

※ め 之 部 ※

めでたいく

めつきりと

面ん冠り

眼にも見せ

眼にごまり

眼を覺まし

眼が見へぬ

眼がねかけ

めんばくない

面ん脱いで

※ み 之 部 ※

未開いく

見たいばかり

みとむない

水上げて

味噌つけて

未練んが有り

見のがして

耳貸して

※ し 之 部 ※

紳士ぶり	しつかりと	知らなんだ
しめて居る	しをらしい	静かな事
辛抱せい	しめたく	しみたれめ

※ ひ 之 部 ※

光かつてる	隙らしい	琵琶湖に近い
日永じやけれど	日を重さね	日延べして
ひつぱり廻わし	燈をともし	久さんじや

※ も 之 部 ※

もろい	ものくしい	貰ていや
勿体ない	もじくと	最ふ一番
餅搗いて	尤もじや	門ん叩き
もくてき達し	最ふよい	物は相談

※ せ 之 部 ※

蟬が啼き	せめてまあ	成長して
責任をび	千に一つ	背が低くい

世話次第

せくなく

精出して

せきしたら

※ す 之 部 ※

すなをな事	すゑたく	すんだく
すらくと	筋引で	すゝめられ
涼しうなり	鮮漬けて	筋違いに
墨溢し		

※ 京 之 部 ※

京はよい所

京の賑わい

京の花

〔終〕



發行念 冠句菊の香

金聲宗匠撰

△いぬ之部

命が延び

辭世の筆で松書く

同

日本語研究しての俘虜

同

特赦後人の遠こふ様る

同

六字脊負ふて浮いた龜

同

廣い思安を借つて去ぬ

同

迂り仕舞の黒衣

同 稻荷ひ

翁の姿くものうへ

同

蝨のこまる腰の鎌

同

棚田は辛度多い小松作

同

モデルニなつた在美人

同

花嫁の肩驚かす

同

豊の重みを肩に笑む

同 因縁じや

死にぞこのふて漁夫の嫁

同 金子で縛られてる笑顔
 同 家三角に切る買収
 同 御陵に偲ぶ老官女
 同 紫雲見上げて鎧脱く
 同 橋に長者の名が残る
 同 舞い勞かれしか花に蝶
 同 驢馬も膝折る老麒麟
 同 卒塔婆小町を舞ふ役者
 同 風邪にこりての醫者迎ふ
 同 浮雲ない花の縁急ぐ
 同 雲見定めて錨り巻く
 同 母がすゝめる月さらへ
 同 月待ち客へ出す濃茶
 同 花鱉搔く除夜の隙
 同 國庫の秘書も賣る書林
 同 めでたい聲のする隣り
 同 二見で朝寝あわてゝる
 出てけり

今はゆめ
 今の間

同 養子を去なしたら娘
 同 減水ご知る標流杭
 同 一ト年寄るご笑らわれる
 同 狩り場に馴た列卒譽る
 同 村の譽れとなる孝子
 同 むさい屑屋がやめられぬ
 同 村長持ちさる人望家
 同 世界に煙たがられてる
 同 直の手に合わぬ京女郎
 同 聯合村での納税高
 同 櫓拍子揃ふ神輿船
 同 目塗りの土藏に書く名前
 同 朝鮮の楠肥後の楠
 同 競馬にたてる土ほこり

同 一二争ひ

△ろ之部

六歌仙

切りの所作事品んがよい

同 同 同
ろくしうに

拜殿の額昔しから
この歌も皆秀てる
踊りの洒落が品ん好む
臉の重は介抱人

同

乳母が夜芝居行き直す

同

繼子于疳に仕てしもふ

同

名だけのくづし笑ふ伯父

同

青樓の電話と知つた嫁

同

娼妓をさすは惜しいけど

同

見合の時と違ふ容顔

同

産家手傳ふ實の伯母

同

いきた曆と敬まわれ

同

大久保の藝で人氣呼ぶ

同

孫に蓬來教しへてる

同

祭り再興に古式説く

同

孝子手引の渡橋式

同

白髭講の幹事持つ

同

けふの酒宴を花ごころ

同

まごまる論を奥で吐く

同

素颜自慢で翁舞ふ

蠟燭消し

屁の會でさる優等賞

同

暗らがり待つ戀軍師

同

十六宵譽て歌仙卷く

同

碁盤で一座驚かす

同

返事せぬのがよい返事

同

叮嚀に仕舞ふ綱行燈

同

先づ有りがごふ濟んだ経

同

腰のすわつた居催促

同

井戸へ案心して這入る

同

是で氣のすむ蚊帳に寝る

同

繼母の聲に佛問出る

同

仕舞ふ車の片輪抜く

同

禿が捨てる化粧水

同

息き競らべ勝つ喰らい抜け

勞働は某

同

胃散の味を知らぬ柚

同

貧青年に多い成功

同

汗は身の肥へ家の肥へ

同

體量の殖へた満期兵

同

郡部に多い徴兵數

同

秘密探つた牢住居

同

獨逸戻るご直ぐ院長

同

贈位の御沙汰碑に歎げく

同

夜襲に落ちる後家の城

同

爪めに燈した灯は大きい

同

身は銅像にあがめられ

同

灘越した鯛味がよい

同

今は子數が孝盡くす

同

倭數見る秋仕舞

同

貴族客ある菊の庭

六根清淨

同

木食の屎そ蠅が來ぬ

同 露次から

極樂連れが蓮に寄る

同

川原町まで急ぐ番頭

同

壳籠で出る南瓜賣

同

運追かけて居る初代

同

曰く有りそな五荷の嫁

同

化けものゝ出る所柄ら

同

憎くい千鳥の聞きごころ

同

家主の糞が嗅ふ出る

同

船へ肩貸す渡し守

同

嫁が押さへる夜具の裾そ

同

柚味増に笑顔してもらふ

同

友引に質受けに行く

同

手術の無理はさゝぬ醫者

同

軽るい槌出す合碁

同

花嫁が田を植まける

同

常着の方も眞綿敷く

同

注意の届く説教果て

同 杖のない方へ廻わる嫁
同 看護婦つけて冬越さす
同 貧苦是非ない出商人
同 中風の親も有る驛長
同 宮中ながらも杖免す
同 知事の扱かふわたり初
同 友の忌日に見る櫻
同 さぞや我が身も草の露
同 よい中垣の證書さる
同 介抱した方が先きへ逝く
同 買ふた雛さへ箱の儘
同 小さい位碑の有る佛間
同 身はすこやかも讀む辭世
同 張る乳かなしい逆か回向
同 最ふ拜がまれぬ氣で拜む
同 媽の意見も大公望
同 嫁を譏しりに來た説教
同 ろくにきかす

杖のない方へ廻わる嫁
看護婦つけて冬越さす
貧苦是非ない出商人
中風の親も有る驛長
宮中ながらも杖免す
知事の扱かふわたり初
友の忌日に見る櫻
さぞや我が身も草の露
よい中垣の證書さる
介抱した方が先きへ逝く
買ふた雛さへ箱の儘
小さい位碑の有る佛間
身はすこやかも讀む辭世
張る乳かなしい逆か回向
最ふ拜がまれぬ氣で拜む
媽の意見も大公望
嫁を譏しりに來た説教

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

△は之部

花じゃく
同 花が散り
同 同 同 同

からしが嫁の愛嬌喰ふ
誤解に荒れる山の神
釘の数だけ見えぬ腕
椅子辭した後は世にすねる
心は餘所に有る娘
只のうくご反對派
舟漕ぐ婆々も有る説教

あげ昆布買に行おちよぼ
冬これなんだ嗟峨のかけ
紙入出すミ座が冴へる
世帯の持てる嫁になる
上戸の嫁が嬉しがる
無常感じる寺男
寫眞の裏へ法名書く

同 同
はり込こて

琴坂ことさかほいながる行脚りょうきゃく
菓子かし受け賣うりの媪おやが減へる
翌日あす退の廊らうに名なをのこす

同

總領そうりやうの徳とくは初着はつしやくから

同

鯉こいで得意とくいさる夜泣よなきき

同

世間せけんへ卑下ひげはせぬ荷數にかず

同

親おやよろこばす初鯉はつこい

同

留守事るすじにだす嫁よめの臍へそ

同

花嫁はなよめにする初仕着はつしやくせ

同

獻立けんたてにない美人びじん出す

同

譽ほめられた子こが砂拂すなはらふ

同

達磨だるまの疲つかる日の表おもて

同

米豊年あはれねで金子かね不作ふさく

同

なぶつて遣やる子こ可相かあそふに

同

親呼おやよんで居ゐる落葉らくはく搔かき

同

花見はなみの咄はなし聞きく中風ちゆうふう

同

豊作ほうさくに土藏つちざう嬉うれし見みる

這入はいりにくい

里さとながら有ある前まへへの借かり

同

暮くれの爺おや待まちつなさぬ中ちゆう

同

生垣せいげん惜おししむ鞍馬石あまうし

同

別莊べつしやう視みく妾めかけの下女げにや

同

文ぶん句く縮ちぢめる状袋じやうぶくろ

母一人ははひとり

國くにに案あんじの有ある洋行やうかう

同

子この教育けいよくに家變いかけわる

同

海うみよりふかい恩おんが有ある

同

杖柱つえはしらごもしてる替女かきめ

同

まだ日ひのたかい斧仕舞きりしふ

同

日曜にちようがさで問とふ兵士へいし

同

蝶てふより輕かるい人心ひんしん

同

貧乏ひんぱふ忘わすれて瓢ひょうと出でる

同

菴いんも浮世うきよの人出ひとで入いり

同

近所きんじよ隣となりもすこいかれ

同

奥おくの院いんにも鐘かねの音ね

同

吠米かみ買かふ車夫くるまの妻つま

春になり

白たへながら霞む峰

同

言ひそゝれた仕方立

同

帯した蟹に山で逢ふ

同

嵯峨から酌婦買に来る

同

職の隙欠く連が来る

同

疊屋連れる儒者の甥

同

驛に新らし名所札

同

そう聞きや一つ徳を得た

同

やつぱり僕の算違がい

同

字引見てから笑ひ合ふ

同

へぼのつめ手を笑らわれる

同

藝は鈍ぶうても有る人氣

同

白ざりが伺おとてゝる

同

練りものゝ妓に聲が降る

同

氣随い見流がす抱へ主

同

今日まで双方不土力

同

縮緬でした幕もある

はんなりと

浮世忘れに行く花見

同

派手に追い出す二の替り

同

揃衣涼しい水淺黄

同

浮く客の多い参宮汽車

同

隧道拔けりや見る白帆

同

着かへる軀りは色直し

同

裏すりや變わる鉦の音

同

暑の嚴びし百日紅

同

笈摺赤ふした御判

同

無事の顔見る捕虜の妻

同

藪入が山近ふ見る

同

親の年忌に戻る國

同

△に之部

日本よろし

漫遊の客が御世辭言ふ

同

こんな米ない私たし國

同

愉快がつてる保津の舟

同 同

山水の美ご婦人の美
支那の政府も意に馴染む
平和の後も居たい俘虜
最後の通牒顔たてる
通辭に問はす枕金子
御所様とくと拜がんとく
母が結納に曆繰る
妹もくべつせぬ荷敷
葬は遺言にそむきたい
門火にうつる揚帽子
柳が笑ふ鯛取り
ゆつくり我精な媽探す
嫁は言ひ譯け躊躇する
子役がせりふ猶つまる
押繪無慙むざ裂き潰す
繼子のふるふ長させる
一萬の敵き散て行

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

憎くいく

筆筭に顔が有るものか
鐘鬼を上げる寺向かひ
川鹿の咽喉へ這入る蠅
死に金子抱た介抱人
引かれた鳩が市へ出る
撮影に附ける針の疵
添へ乳が見てる蚊の行く衛
影口ながら妾恨らむ
孫せぶらかす屎そ丁雅
後家に知られた後家恨らむ
奉公初じめの恩算ふ
案内を乞ふ赤毛布
花に賑ふ京の春
みんな田苧りにかゝる秋
湖水へだて、同じ國
此一番がけふの相撲
膠州灣に照る御旗

西も東も

西から日の出

同 同

二三日

人氣よし

かん違いした旅の空
狂ふた磁石迷ふ艦
介抱も同じ夢祝ふ
夷支座で見ると見浦
つい撫て見るまゆの跡
手輕ふ金融たのんでる
介抱もほいながら泪だ
咄しの盡きぬ旅戻り
東京へ小便ん笑られる
水車休ます田植時
里への嫁は曰く有り
撰擧も延る大深雪
石油買ふごく轉宅後
娘の笑顔福の神
五千萬人喰てのこる
戦勝國はこんなもの
相撲は強よし頭は低い

同 同

二軒から

同 同

△ほ 之部

同 同

虫に喰わさぬ御宸筆
先祖大事と棒祭る
三種の神器國だから
まだ正金の有る舊家

米屋のかけに屑づがない
銀主が棧敷せもふ見る
何處の織屋も手がたらぬ
情死助けた禮が来る
良縁迷よふ親ごころ
美しく掃く雪の門ご
娘と聳の提げ競へ
義理を重んじて投標せぬ
奇進合併の石燈籠
本家顔するみすや針
競争して居る酒の利き

保存して

同

同

帆を上げて

同

同

ほそいく

同

同

同

同

同

同

外になし

同

同

同

張り交ぜ一雙壽の紀念

國のたからごする造營

國寶ご成つた羅漢の像

寡が晝寝笑らわれる

壩風走しる貝も有る

八景の數になる矢橋

姦婦が笑ふ情夫の膽

菴の道だけ搔く落葉

濱師が笑ふ職の手間

片足畑へ牛除ける

文字の不足を聞く傘屋

辨慶の上使語たられん

阿の腕で城傾ける

常餘所行もはづかしい

爰々で取れます驚不知

仁と義に富む國の風

是は手前への特許品

同

同

星をいただき

同

同

同

同

同

同

程がよい

同

同

同

同

ほんのりこ

同

同

體らだはをろか命でも

萱の御屋根があらたまる

和尚ご茶で聞く花の音

願んの嬉しい初い孕み

帶地屋の下女結構がる

禪とし持ち等の場所入り

妻にまたるゝ戻り牛

一ト日の業を早よ濟ます

元日だけは早い妾

嘘知つて買ふ廓の愛

影ごは違ふ小姑め

無心吹き込む夜の閨

お多福じやけど四千壽

番産の子が廓戻り

今が見頃の初さくら

突き出し極めるあぶり海苔

麥畑に知る日の遊とり

ほのくさ

極樂の様な巨椋池

同

最ふ鯖舟が磯へ附く

同

摘み人の急ぐ紅花畑

同

袖に霜知る薪能

ほつさして

金槌出して来る隠居

同

柳見に出る春の雨

同

おうまたでさす碁のこぎれ

同

渡し場で買ふ艸の餅

同

毛彫りする眼が青樹見る

本望遂げ

金子喰た妻の酌に酔ふ

同

假名の手本になつた義士

同

起證重ねて笑らい合ふ

同

並ぶ枕もゆめでない

同

最ふ編み笠に用は無

同

緋衣で親回向する

同

汗拭きに出た蚊帳の外

同

後妻に直る引き祝

同

卒業またれた親迎かふ

同

産み遅れても左り腹ら

同

乳々屋の連れも有る博士

譽られて

歌種となる郭子

同

毛糸の仕事隠す嫁

同

人に吸われて居る葺

同

禪きに樂をさゝぬ嫁

同

只ならぬ子になる検査

同

一人り息子に嫁が降る

同

落し主から元手借る

同

我れわ盡すと知らぬ孝

同

貧んわ器用の手にまごふ

同

個が辻相撲取りごほし

△へ之部

下手じゃく

こても世嗣を抱けぬ嫁

同

卒業生ごはみえぬ圖書

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

翠簾の下りるを待てます
ほめられて居る音頭取り
同じ事して産めんこは
をかしかそばせふり釣瓶
誤まつて来りや濟むものを
まだ密書書く筆じやない
日毎に學校で何してる
繻袴が無二膏持つて退く
氣のせく用も慕ふ孫
なさぬ中ごは世にみえぬ
指輪いじつてさす妾
四國巡つて来た虱み
竹に眠るか蝸牛
旦那へ這ふた下女の蚤
金子で包ゝめぬ媒人の禮
遂從言ふこをこられる
哲學こやら學ばしやる

へん屈くつな

同

美術家ながら妻がない
後家惜しがるご怒りよる

同

外宗すゝめ人叩き出す

同

恩賜たまわる出納役

糸爪へらまでくらし

無ければ酔わす有らば酔ふ

同

あせる程猶貧乏する

同

めつたに天は落やせん

同

呑み代呂湧す欠け硯

同

貸しよる所の米喰てる

同

命取ろこは言わぬ借り

同

浮世の風に逆らわん

同

親の資産にぶらさがる

返事へんじのよい

嬢の理想に合ふた縁

同

立つ跡に有り蕘の輪

同

媒人通して馳走出す

同

ボチ切る客が手を叩く

同

笑顔えんごで出てる電話室

同 師團の規律正しかる
 同 其癖おちよば油ごり
 同 寸善の間の縁急ぐ
 同 辻占解いて鼠啼き
 同 錫の茶壺の疵惜しむ
 同 肥へ過た下女笑らわれる
 同 沼の坪数がごりにくい
 同 眼は吸ものにならぬ鯛
 同 修行の出来た叩き鉢
 同 打たる、杭にならぬ智慧
 同 秀句の出来ぬ肢ち蒲團
 同 世継ぎの咄し出ぬ石女
 同 横からみるご見ぬ鼻
 同 無事に嫁入した出臍そ
 同 せんをねじたら火も水も
 同 咄しの出来る幾く百里
 同 智慧さへ有らば金子も寄る
 同 便ん利な世

へんりじやな
 遠國の魚引く氷り
 自轉車買ふて丁稚減す
 牧場の牛で子が育つ
 墨附ける世話いらぬ筆
 三伏の日も製氷する
 起きりや臺所寝りや寢處
 旅費は銀行へ替爲組む
 羽子もないのに人が空
 保護者の有る水泳ぐ
 最う退院も近いけな
 各く町々に自身番
 柝呑みが釣りよんで去ぬ
 堤みのこたへする柳
 打電は醫者がとめに遣る
 御堂の傍に吹上げる

同 へんりじやな
 同 遠國の魚引く氷り
 同 自轉車買ふて丁稚減す
 同 牧場の牛で子が育つ
 同 墨附ける世話いらぬ筆
 同 三伏の日も製氷する
 同 起きりや臺所寝りや寢處
 同 旅費は銀行へ替爲組む
 同 羽子もないのに人が空
 同 保護者の有る水泳ぐ
 同 最う退院も近いけな
 同 各く町々に自身番
 同 柝呑みが釣りよんで去ぬ
 同 堤みのこたへする柳
 同 打電は醫者がとめに遣る
 同 御堂の傍に吹上げる

▲こ之部

どこやらを

金庫の鍵に困まる妻

同

逆鉾で圖を探り出す

同

衛生掃除する妾

同

醫者も毒意味言ひにくい

同

棄り忘れて本さがす

同

占領しられたらしい後家

同

日々に麝香の減る娘

同

壚ふみに出す小間使

同

小袖の多い女風呂

同

隣り同士も嫁知らぬ

同

中京は茶糟迄違ごふ

同

垢ぬけのした嫁譏しる

同

間口によらぬ營業稅

同

大町の割りに戸數が無い

同

聞た極樂あきれてる

同

櫃履いて嫁入する

遠からぬ

燈臺高ふ船で見

遠らぬ

妹この年も問ふ媒人

同

裾野で雪の噂する

同

妹の看病浮雲かる

同

釣り場が職の邪摩になる

同

山一つ越す踊り好き

同

戀歌の解せぬ花造り

同

靴音恐れてる女將

同

伺たけのこす人へらし

同

雪見待たして座敷掃く

同

案山子の首を抜く酒屋

同

笑らい咄しの枯尾華

同

蠟燭の灯を消す眼利き

同

圖案家の立つ落葉山

同

妾の年頃聞き直す

同

指びまで切らしごきながら

同

病む手を合す貸し蒲團

同

親の權利か粹てまい

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
こてもく

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
年くに

食客逃がさぬ後家の腹ら
去らるゝ罪は石女でも
なびかになり元利も返やせ
腹らに居る子も置き去られ
咄しにならぬ其直でわ
我慢んしてゝも年がこし
宿這入にわ嫁過ぎる
雛屋がむつこかたづける
慾てば出来ぬ人の世話
此子にかゝる壽わもてぬ
父が買わさぬ博多帯
兀げた天窓が又兀げる
縫上げ嬉しう下ろす母
雑煮の箸わ伊勢で取る
笑らいの殖へる布袋棚
喰い餘る米施行する
初荷の殖へる運さかり

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
飛上り

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
とろけてる

古巢慕ふて来る乙鳥
御獵あわてる雲が畑
見送る花車も有る御受け
頓ん死の夫にこつをいつ
軍港襲ふ飛行船
家令の困まる獵の供
老若藪の方へ逃げる
召集令より腕が鳴る
二人が巡はす繩趣へる
船へ来た魚放なす漁
上み八枚も怖ふない
すつてにふもこした蝮
小賣米屋が別荘買ふ
眼から火の出た一つ灸
廣い世を見る井の蛙
持つてた甲斐の有る農家
臺灣の夏懸け直言ふ

同 同 同 同

芋の焚き様はむつかしい
笑やられられぬすねりや猶
溜壺からたつ火が凄
猫が鯰の髻なぶる

△ち之部

ちんば引き

泥の自轉車押して去ぬ

同

手桶の水が踊つてる

同

舞臺の土橋凄ふむ

同

直して貰ふふだり帯

同

富士傘に乗せ傘に入れ

同

内娘でも卑下してる

乳呑み子抱き

女髪結減る得意

同

歸朝の夫こまつ波止場

同

姉聲の世に氣兼ねる

同

又酒癖を歎げく妻

同

夫まに大書く筆わたす

同

母はうしろに居る寫眞

同

同じ幽霊の畫が凄

同

看護婦會へ辭表出す

同

流連泣きいらん廓へ行く

同

床屋の透をき覗く嫁

同

伯母も肩脱く縁咄し

同

茶漬は遠慮する丁稚

同

殊更大かい眼玉して

同

建石に指び堀て置く

同

満汐告げて啼く千鳥

同

産婆迎ひに哇走しる

同

山貫らぬいて線絡敷く

同

赤子ごしては火がきつい

同

別家へ落す座敷市

同

望む田地の札入れる

同

打盤の禮吐息次ぐ

同

貨車運搬もする仲士

近いく

同 同 同 同 同 同 同 同 同
 珍ん無類
 同 同 同 同 同 同 同 同
 血にこりて
 同 同
 智惠絞り
 同

地獄筒から出す義捐
 繼母が出した荷が重い
 棒押が屁で分けになる
 賃んは餓頭で濟む按摩
 先き引の屁は許るす夫ま
 家内中の汗田がいきる
 けふも妾に塗りまけぬ
 世界ひごつに寄るような
 赤種譽て西瓜喰ふ
 焼けた鰻に碁盤突く
 是程の富士知らざる也
 物言ふ花が酌に出る
 鼻が低ふて直が高い
 沓ずれが足泣いて行
 板場の傍へうせぬ猫
 腦ういためてる試験前
 手遊ながら特許品

同 同 同
 ちつた〜
 同 同 同 同 同
 千鳥足
 同 同 同 同
 近頃出来
 同 同 同

懸賞の圖案念入れる
 世の鑑みともなつた國
 作者の嘘がをもしろい
 魚は賢い竿の影
 浅井膏譽る肩の凝り
 釣鐘ながら晝煙火
 さくらは人のささし艸
 花園も最ふ淋し驛
 歌の様に持つ寶篋
 溝趣へるのは大丈夫
 花の下にはない不景氣
 江戸で名高いでん安
 譯けのわからぬうた謠ごう
 大入しめた連鎖劇
 敵きの大砲を大砲かる
 嫁の斥候が妾探ぐる
 長良公園まだ淋びし

同 同 同 同 同 同

空にも油断出来ぬ隊
辞令戴く新艦長
廊へ向く足繁くなる
最ふ水害のうれいな
立木参りも乗る電車
在所に若い電話番

△リ之部

隣家から

蚊も添ふて来る夕煙り

同

後妻すゝめる出商人

同

よい事にして出来た柿

同

こぼこぼで来た雛の客

同

竹法螺で風呂知らす里

同

高砂むつと聞く寡

両方から

娘見に来て見られてる

同

言葉通じる電話局

同

墜道うもふ測量する

同

双子に寒い母の胸

同

平和を保つ國と國

同

よい中親は教しへねご

同

ハンカチフ振る帽子振る

同

苦情の多い合長家

同

盤面んだけは敵き同士

同

媒人の嘘責めて来る

惘氣せぬ

中々嫁は侗で無い

同

樂家の後家になれる妻

同

妾も同じ鍋の飯

同

夫まの上わ氣は子無き罪み

同

家の道具と思ふ嫁

同

子の教育と重い家事

同

焚つけたかてて見ぬ嫁

同

媽は相談した鏡み

同

乳分ける子が最ふ馴染み

同

妾にも貸した金屏風

同 控かへ力士が油断せぬ
 同 下がり蜘蛛見て膝叩く
 同 持てぬ算盤持ち直す
 同 耳に這入らぬ除夜の鐘

△ぬ之部

同 抜いたく
 同 暴舉制する保護の劍
 同 時間の限り取り語り語たる
 同 仲士に荒らい錢遣かひ
 同 袋町こは最ふ言はぬ
 同 白髪を見せぬ氣が若い
 同 鐵道院が懸賞出す
 同 水泳の術盡くし合ふ
 同 乳母が預けた子を肥やす
 同 新家の弟と貢ぐ母
 同 妻には見せぬ影の花
 同 相場場の損んが見切れぬ
 同 抜けつかねつ

同 ぬからぬやつ
 同 影では裂けてない生ま木
 同 最ふ墓の角ごかいで有る
 同 糲に羽叩きせぬ目白
 同 南瓜棒ぬき買ふ長家
 同 妾が旦那の母も抱く
 同 受取書かぬ運動費
 同 入網みも張り獸狩り
 同 甲白ふする池の龜
 同 パイプ巻いてる南うけ
 同 漁の利く灯が北へ寝る
 同 味増のなだれる柏餅
 同 瓦の黒む酒造土藏
 同 泡だつ水に落椿
 同 脊中に嘴置く庭の鶴
 同 電燈會社が告訴する
 同 嫌疑わ二食からかゝる
 同 盗人の朝寝
 同 媽に食客がづうくしい

同 同

夜通し水を田に入れる
木魚驚く椽の下
藪入りの下女旦那待つ
和島の土産結構がる
舞臺の容顔買冠る
松の位いは下駄にまで
土産の蝶に添へた箸
剥た大根が俳の牡丹
三助叱かる角力取
芋汁困まる八字髭
風呂も氣わるい間いの驛
榊に専茶いのこつてる
置き土産まる瀬戸物屋
疏水で米の俵がゆるむ
破れ垣綴る龜の池
置き候が媽騒わぎ
大事の媽の保護願ふ

盗まれて
ぬき足さし足

鱗一枚減つた鯨
廊のやみ出る帯はしご
頼ん兵衛はにくい田葉粉盆
道ならぬ閨凄ふ出る
牢格子からゆめ起す
入れ墨の兄逆がす妾
田耕の牛よだれくる
良縁ん咄し聞く娘
難ん題旦那類い出けぬ
隣り村まで降りながら
蟬は木の根に更衣
麝香の去んだ古丸子
墜道測量無事祝ふ
氷屋だけは笑む夕立
四貫割木に目が軽るい
日本軍法に類い出けぬ
鬼蔦の這ふ炤魔堂

類いは友
同 同

類いは友
同 同

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

納豆汁吸ふ時雨會
更けた島田がはづかしい
身の憂きかたり合ふ苦界
動物園はひまが入る
博覽會が人まねく
柚が家で逢ふ鹿の客
菴の墨減す月今宵
情死の協議血でからむ
大がい踊りの輪が切れぬ
卒業紀念に寫真こる
妾の下女は化粧好き

△る之部

留守ながら

同 同 同

隣りの駄賃取りかへる
花守りの貸す歌の席
替わらぬ繼母嬉しがる
花臺へ妻が眞似活ける

同

影日南無きまう思ひ

同

御得意不自由さ、ぬ嫁

同

符帳商い嫁で足る

同

嫁は佛間の禮欠かぬ

同

輕るふ産めたご嬉し母

同

例年通り置く箕賣

同

法主一人は違ふ袈裟

同

秘藏の茶器は拜領品

同

傘止め一人り勝ぐれてる

同

商標に注意乞ふ本家

同

人に撫でられる佛

同

風起こす雲雨の雲

同

英語わきまへ有る全盛

同

蝶はいろく替わる色

同
るすでもよい

同

さしづめ急ぐ用でない

同

軒へ返へして置く車

金子さへ有れば淋しない

同

爺には用のない娘

同

調らへるだけの權んが有る

流勞して

國出る時は若旦那

同

老僧の足は艸鞋蛸

同

我の遊藝が役にたつ

同

笈摺の譯け聞く哀れ

同

虫賣りが子に手引さす

同

獵に着て出る陣羽織

るす事に

くうつくりと寝て見たい嫁

同

小遣かひ帳へのらぬ芋

同

丁稚はやはり遣かわれる

同

欺まして島田二度こする

同

白髪染めてる老女房

同

實母の位牌出す娘

留守つかい

今日も生きもの寫す畫師

同

おた福風邪を除けて置く

同

日の延ばしたい無常風

同

勉強が花の連去なす

同

いやな返事に媽遣こふ

同

押入の屁が露現する

類いの中から

果報召さるゝ斑ら牛

同

神一体で事は足る

同

蜆貝にも有る薬り

同

田上米は優等証

同

瀧登りする魚も有る

同

一と際目だつ扶桑艦

同

白は出ぬけて居る五形

△おを之部

をつとどつこい

庚申の夜はよらぬ嫁

同

岡かへ手渡しする西瓜

同

政談入れぬ未丁年

同

殻ら搗かんぞこ杵やめる

同

馬糞飛び越すゴム雪踏

同 をごなし

をればようとやせんとこと

無理も苦にせぬ孝の常

同 人馴れて居る神の鹿

家いへのしづに染まる嫁よめ

同 兄は譲りの土ほせる

母ははのしづが子こに見ゆる

同 獵する猫は爪めかくす

親おやの方はうからいそく嫁よめ

同 野暮のふみ折る紫檀したん棹さし

下女げにょの育そだたぬ譯わけけが有る

同 首は望みにない戦争

夜警やけいは賊ぞくを棒ぼうで知らす

同 追まわし

ひよるはしこふ仕てる孫まご

同 先きの神輿かみこもめになる

人ひとん家かもひらけ田たもひらけ

同 町風浴まちふうよくこなつて来た女房にようばう

雲深くもふかふ入る不二ふじ詣まうて

同 雲深ふ入る不二詣て

同 雲深ふ入る不二詣て

同 雲深ふ入る不二詣て

同 雲深ふ入る不二詣て

同 雲深ふ入る不二詣て

同 雲深ふ入る不二詣て

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

進歩出来て鳥の眞似

形り派手になる菊人形

乳の黒い媽肩かたで息いきき

酒の上かみがつた春三はるみつツ月

終しゆう點てんですこ言いふ車掌しやうざう

幼男おんなよろこばす今いま朝あさの雪ゆき

問屋もんやから店みせ派手はてにする

勝かつた角力かくりきが愛嬌あいけうふる

強つよい子ここして土拂つちばらふ

墨染すみぞめの袖そでぬらす萩はぎ

音ねのせなんたた椎拾しいふ

息子いすここ後妻中ごさいなかがよい

家いへに土藏つちぐら有あり黒木くろき賣うり

茸山たけのこ譽まほる下女げにょの里さと

藪醫やぶいの匙さしに壽じゆを拾ひろふ

代參だいさんの鬮くじ結構けいこうがる

早青島はやあしまにたつ國旗こくき

チ、こわや

同

老に氣のない飯し加減ん
船出すのなら出すと言へ

同

尻餅搗た救助網み

同

劍ぎに増さる下女の舌た

同

誰れぞや翦れた矢は怖ふ

同

あんな鬻が命ざり

同

般若の面んに入る魂し

同

虱らみの目だけ引く屑屋

同

二階出入りの越の雪

同

参拜人んが國盡くし

同

一と目千本んどこじやない

同

何處から這入ろ五形畑

同

姉のふかにに指び輪抜く

同

所望の花じや切て遣れ

同

是悲のふ拂ふ松の雪

同

鶴だけふます苔の庭

同

望まれ時が花の華

羅文

同

花に嵐は仕様がな

同

譽められた禮にわける花

同

出憎くい暇でも縁定め

同

神と成つてる乃木夫婦

同

散る日に近い花ながら

同

亡き子を思ふ親心

同

引く品の有る座敷市

同

口迂らした不二のゆめ

同

疊が呑んだ一と銚子

同

狂氣の親が案んじてる

同

凝りた不肩の氣が變わる

同

病中に過ぎた春惜しむ

同

老行く我れをかこつ妾

同

忠魂の碑を尊敬する

同

戦争にへらす金子の高

同

督促までも出さぬ税

同

末ゑわしめ張る子供らし

大きいな

大きいな
を嬉し

煤拂には入る團扇

書置見たらぬけ参り

此子一人が縁んの綱

禿が冬の拾らひ主

互がひに首尾の膝くづす

見舞に貰た借用證

△わ之部

わたつたく

最ふ此相撲分けらしい

工兵も無事に架橋して

養老の金子を賀に奢る

浪路遙かに月の雁

拜がまれそうな緋縮緬

添ひたい人わ何處のたれ

守りは下げて居るもの

よい容顔じやに遅い縁

男嫌らいがよい容顔

譯が聞たい

よみ人も知らぬ閑古鳥

姉様はなぜやつすのじや

猫のもれてる涅槃像

財布に妙な畫を入れる

地球廻わして居る隠居

尼の秘藏は緋の袴

古稀けなりがる百翁

串焼にまだならぬ鮎

小指が京に置いて有る

達者な乞食説諭する

また十徳は不移りな

無披露式にも子が出来る

養生めかねを椽へ置く

花より嬉し接木主

都で聞けぬ鳥戀し

彌助が賤の風容恥じる

嫁と競争で産む姑と

若いく

同

同

同

同

同

若葉見て

同

同

同

同

忘れぬ

明治陛下の御恩澤

同

後妻にたのむ精進日

同

はじめ憎くしと思た人

同

餘まる米にも麥交る

同

旅の恥じこは言ふものゝ

わざくと

茶室に京の大工呼ぶ

同

献ん立買に來る山家

同

咄し種見る牛祭り

同

端書氣の毒がる山家

同

孫見に苞の栗提げて

割つては言ぬ

縁の邪魔せぬ兩隣り

同

湯屋笑ろて出る聞合せ

同

美男の番頭暇貰ふ

同

師は慈悲ふかい破門する

同

戀のかけ橋つらい乳母

同

謎で言ふのも嫁の智恵

同

苦節は雪の南部坂

同

月たらずとは表向き

同

御寺参りにごまる後家

同

近所へふつた聞合せ

藁で拭き

南瓜畑を出る南瓜

同

都にすぎた一こ構へ

同

竹細工屋が油抜く

同

鐘樓室ゆかしい花の奥

同

疣痔切れ痔に變更うす

同

かけた疵見る鉄の先

同

其顔もせぬ在美人

同

嫁ははづかし帯の染み

同

經濟守る村の長

同

花嫁じゃけど在産れ

同

押切り砥いて飼葉切る

同

福の神様まねきたい

和合して

悋氣の裏が睦まじい

同

家の締りに透きがない

和合わがまして

同

同

同

若わかい中ちゆうから

同

同

同

同

忘わすれてならぬ

同

同

同

同

同

同

天地てんちの恵めぐみ稲いねの出来でき

樂たのは好こののまぬ氣きが揃そろふ

媒人まいたいへ不沙汰ふさた詫わびる母はは

國くにと國くにとが利りをはかる

外交がいこうの技倆ぎりやう富とむ公使こうし

腕うでで利ききそぐる餘興よきんの舞ま

薄うすい資本しほんを賣うる味噌屋みそや

先まづたてものを遼ならす廓くわく

親おやが案あんじる有ありがたや

數かず取りたけの豆祝まめいねふ

家督かとくの田地でんち小作せうさくする

墨すみ入れ替かへる紀念ねんん石いし

恩赦おんじやさこして居ゐる監守かんしゆう

義士ぎし銘めいい〜に腹はららに有ある

學校がっこうへやつた甲斐かひがない

耻はじを勉強べんきやうの杖つえこせい

實じつつの親おやより義理ぎりの恩おん

笑わららい〜

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

かれこれこ

か之部

耻はじは互たがひに猿さるの尻しり

跡あと戻もどりする袋町ふくろまち

數かずよんで居ゐる年としの豆まめ

粹すいきかし人ひとが留守留守頼たのむ

足たらぬ座ざを立たつ泣なき上戸じやうこ

ころし屁へ吟味いんみする屁主へし

和合わがまの家いへにたつ陽氣やうき

貸かしはくれん氣拂きはらわぬ氣き

隣となりの媽はははよふ喋喋べる

深しん切せつらしいいやらしい

最もふ見みよし野のも盛さかりやろ

あの娘まんながなら廿歳にじふさい過ぎ

心こころは隠居いんきよしてぬ婆々ばば

會議かいぎ終しまるご指揮し急いそぐ

半季はんきかゝろが膠州灣きやうしゅうわん

かれこれと
感心じや

最ふ百近い様ご思ふ
墓捨置がぬ若世帯

同

養子中く出来るけな

同

木綿より着ぬ金満家

同

小作保護する大地主

同

豚飼ふても奇麗い好き

同

見上げる人の頭が低くい

同

兄嫁まもる小姑

同

嫁さんのほど笑ふ莖

同

個になつても汁は吸ふ

同

嫁の早鮓馳走がる

同

若狭に限ざる鰻の鹽

同

孫を裸で抱く湯殿

同

水の試験もする軍醫

同

世帯持たすと刻み呑む

同

平和も油断せぬ演習

同

紙幣は革盤の外がに持つ

同

同

座頭百人ん川わたり

同

子にも眼鼻をつけた畫師

同

いやな見合にちんば引く

同

汽車も電車もふみくだく

同

樂家であらい女形

同

媽の天窓で土瓶割る

同

最後通牒の元老會

同

握きつて茶碗割た關

同

拾らへる徳を蹴り飛ばす

同

落ちぬ達る摩に笊投る

同

灰汁桶の口箸で突く

同

撥の手叩く長煙管

同

堪忍袋売らにする

同

眼へ這入つても痛ふない

同

馬の首着は御手づから

同

添ふても指びが九本半

同

下たに寝ぬ子にして仕舞ふ

同

疔癢をこし

可愛さに

可愛さに

かなめ

辛い卒業す賢母

抱かれてる子が雛の主

菊の御威光が國しめる

眼こ入れたら最ふ佛

腰元の名が男めく

株は稻よりない舊家

末廣ふ千代かためてる

世帯のしまりしめる嫁

毛脛が泥の儘乾く

談判はまだ幼稚園

翌日の雨知る灸の跡ご

湯屋で拾ふて來たらしい

簪で搔く嫁の髪

毛の首巻は嫌ふ老

脊中へ入れる鯨尺

私たしが出たら傘がいる

妾が散る花淋しうみる

かゆいく

同

同

同

同

同

覺悟して

同

同

選文

最後爰いざ出し國家

下たは白衣着た乾兒

妻が自首を踏躑せぬ

忌中鬘から更ける嫁

擔架の上で辭世よむ

よをはらたけた此兜

あやかりだがる綿帽子

狐の守護水鏡み

不肩は重い鍋の數

我の帽子は知る盲ら

岩奉る伊勢の海

下馬札にまで墨が浮く

國へさゝげる身が戻る

銚の滴が一等國

家は異なき壽が傳ふ

踊るも教しへ天理教

地圖の説明する教師

同

同

同

同

冠つてみて

同

同

同

神の徳

同

同

同

同

同

同

同

神の徳

孝の祈願んは知らぬ親

同

金剛石より光かる國

同

信有らば道照らされる

同 數を重ね

嬉しく還つて來た曆

同

千枚張りの頬らの皮

同

天惠の雪は積る年

同

我れを忘れてはしこ酒

同

不義の隠くせぬ岩田帶

よ之部

よしや又

わるいにしても親は親

同

悋氣を叱かる里の母

同

支離て無けりや女でも

同

容貌が喰へるもので無い

同

嫁し付いたらば内はない

よがろく

すゝむ所ならやるがよい

同

呑む相談は直ぐにへる

同

三味線持つて酌に出る

同

蓮見のにえた通夜戻り

同

幕串打たす花の位置

同

此土用ならたのし秋

夜が明て

廓果てに似ぬ朝禪き

同

咄しは後にゆめ祝ふ

同

漬け針上げに小舟漕ぐ

同

冥伽思ふご寝てられぬ

同

實に白たえが酒急かす

よだれたれ

きやく言ふて見てる本

同

月代剃らす金魚鉢

同

どさんと轉げ物言へぬ

同

廓へ湯水は親の汗

同

米三俵はぬらい牛

夜も晝も

働らく夫の無事祈る

同

助け兵衛が芝居つき通し

同

運の盛りが油断せぬ

夜も晝も

娼妓に出来る枕元げ

同

孝は怠りない今端

よろこんで

片親泣かす位碑持

同

施しの世話する米屋

同

旗持ち運ぶ虎運ぶ

同

身請この文親へ急ぐ

同

杖にして居る孝の肩

同

名所見のここ春の旅

同

支拂停止する銀行

同

宿屋で爲換まつ介抱

同

弾ん丸軍需露國から

同

山番に酒買に遣る

同

是程怖いものはない

同

主じ見込みでない後妻

同

貫ふ子に聞く金子の高

同

眼の色違ふ嫁もろふ

同

金子借てまで米のこす

同

嫁連れて

同

呪ひの石またげてる

同

御室の櫻見せて居る

同

子も積んで引く嵯峨仲士

同

蕨配らす柴得意

同

よい姑女になりすます

同

我れへの意見嬉しう聞く

同

同情の涙をしまさぬ

同

嫁呵かるのも遠廻わし

同

新聞の孝嫁へ讀む

同

共同走りに論が干ぬ

同

諫言の齒に絹着せる

同

國の光りを出す博士

同

君の御威光尙も知る

同

順行奂行笑む力士

同

盥の洩らぬ宿這入

同

下女わひと先づ洗らひ替へ

同

お白粉の香の濕る部家

嫁が来て

分家からも戻る母

同

御咄なし煽つ夏座敷

同

女らしうなる小姑

同

最ふ仕立屋に用は無

同

桔梗の暖簾子と潜る

同

杖も慥かな説教果て

同

息子の孝が薄ふなる

夜徹しに

汗汲み上げる田の命

同

危篤見舞が急行買ふ

同

鐵道復舊の工事急ぐ

同

看病に疲勞せぬ孝子

同

工事抄とる新御陵

同

火を用心の御大典

同

水かゝて居る腫れまぶた

同

新茶の土産買ふて去ぬ

た之部

欺されて

田畑線香の灰にする

同

秘密にらす酒の上

同

錢のきれ目わ縁が無

同

家土藏流がす泥の水

同

我が正直をくやしがる

同

狸が一人り夜を明かす

同

傘が荷こなる朝曇り

同

猫の餌になる白鼠

同

温室の花早ふ咲く

同

藪入り前は里ごころ

同

呑み料の茶を造る菴

同

藪入りに見る親の顔

同

指び折り算ふ言號

同

稼ぎ合ふてる新世帯

同

鱗の光かる網たぐる

短氣く

あれでは嫁が氣のごくな

同

媽がたいての事じやない

短氣く

同

勞うした功うも水の泡
後悔の種蒔て居る

同

渡しまつより尻まくる

たのみに思ひ

憂きはらす夜も有る苦界

同

賣らるゝ姉のひざぬらす

同

何事にも別家呼ぶ

同

鯉で精進落す乳母

同

嫁の辛抱は夫壺入り

同

樂さす親の壽を願ふ

同

農家ばかりの秋で無い

同

小作へ涙有る村長

同

肥へ代貸して笑む地主

同

抱いて寝る子も留守の妻

同

嫁みた醫者が祝て去ぬ

同

御連尊き國の君

同

甘茶もろふ日孫に説く

同

屏風が浦に有る曰く

同

痔持ちの雪隠より輕るい

同

離縁の沙汰もたち消へた

同

腹らは御湯殿番んじやげな

同

旦那へ電話かける華車

同

拍子喝采場がうなる

同

聞くも心地のよい辯護

同

國の利益き議場で咄く

同

被告に堪納さす辯護

同

表具洗濯こつてする

同

壹錢五厘儲かつた

同

此子でござる御ヒイキに

同

出征の伯父に母一人り

同

近所へ腰の低くい嫁

同

大非影身に添ふ順禮

同

儲ける時の氣で遣こふ

同

嶋田の出来に蚊が這入る

同

まだ手をつけぬ恩賜金

大事だいじにして

同

今は我が子でない寫眞
紀念かたみにのこす父ちちの筆ふで

同

添そふたら惜あはしうなる命いのち

同

來き春はるを待つまち粉こなの種たね

高たかい

空そらにそびゑる天狗杉てんぐすぎ

同

お茶子ちやこの尻しりりを叩たたいてる

同

押し附おしけの荷にが運うんよせる

同

雲くもから落おちるよふな瀧たき

同

雷かみも夕ゆ立だちも下したたに有ある

同

實けに名山めいざんは雲くものうへ

同

つけ見みて酔よいが覺さめそうな

同

安やすい鯛たいて喰くて醫い師し迎むかへ

袂たもとを調しらへ

繼母けいぼの凄せつい鼠ねずみ喰くひ

同

唐辛子とうからしから嚙かんでない

同

ハンカチ誰たれにお貰もらひだ

同

又またも悋りん氣きの種たね見み出す

同

媽かつのめだち候さうかしく

同

選舉せんぎょ違い反はんを皆みな上あげる

同

姉あねが直なしたらしい針はり

叩たたいてる

中なかの吟味ぎんみをする西さい瓜か

同

音ねのはげしい麥むぎの秋あき

同

納豆なつと秘傳ひでん有ある和尙わしやう

同

音ねも豊ゆたかな在祭さいまつり

同

木魚こぎよに隠かれてる小僧こそう

同

出で好すきの癖くせにやつしたい

同

前垂まへだれ一ひとつ縫ぬふ妾めかけ

同

城しろは一いち夜やの割わりり普請ふしん

同

樋口ひぐちへ村長むらぢやう來きてもろふ

同

風呂屋ふろやへ中風ちゆうふう負おふて行ゆく

同

二王にわう昇かき出たす門もんん普請ふしん

同

象ぞうと興行こうぎやうして歩あ行く

同

夷子えいすにこくくにこそ鯛たいて

同

猿さるが銃じゆう先拜せんぱいがんでる

同

松まつの芽生めはへは自然石ぜんぜんせき

同

だいて居る

市松の利き自みえぬ妾

同

無理情死でない二人り

同

ゆめも涼ずしい竹婦人

同

鳥獸も同じ親心

同

壹町丸める雪轉らし

れ之部

禮義正しい

折目くづさぬ袴客

同

禪家の揃ふ牡丹客

同

貧しい中に有る古風俗

同

花は操の身から咲く

同

早稻田出てから派が遠ふ

同

一世の曠の座に据わる

同

黒紋付に皺がない

同

嫁にする氣の教しへ方

同

軍隊に居た徳が有る

同

それ者上りこみえぬ嫁

同

出征の夫に影の膳

禮に及ばぬ

私たしの灸は人助け

同

我れも願ん有る遍路宿

同

助けてもろふて樂な乳々

同

丸ふ納まりや結構ちや

同

死んで花とは言われんぞ

連帶して

兄のちからになる義弟

同

つかわぬ金子に俱だをれ

同

田地買ふ金子借つてやる

同

宿坊保存の講結ぶ

同

嫁の里まで俱だをれ

例の通

辯士交代して説明

同

初穂の藁を注連にする

同

職方も呼ぶ蛭子講

同

藁苞の添ふ梅たより

同

旦家へ苞の納豆やる

同

先づ席順は年長から

例之通

中の亥の子の牡餅丹

同

明けた火燧に小豆買ふ

同

京さわがしに来る俳優

同

伯父が持て来る追灘麥

れつをつくり

喇叭の音が勇ましい

同

御所拜觀が蛇のをとろ

同

遣りぶりも有る時代祭

同

品んかく譽める葵橋

禮がてら

無罪が拜がむ梅林

同

媒人へも寄る宮参り

同

介抱が花の社内踏む

同

拜觀をする松の内

同

三人で見る燕子花

同

教育家には適き當せぬ

同

繼子不性く保護願ふ

同

花で益き見ぬ寺の世話
借つたら返へす事知らぬ

冷談な

同

市民のぼやく賣收額

同

破産から妾氣が替わる

同

後妻譏しつて去ぬ棚經

同

妾宅からの祝ひ餅

同

占領しられた貸した傘

同

迷い子連れて去ぬ繼母

同

買に來た慣様去ぬ施行

同

不足ならをけ物もらひ

同

義理こり交わす年の暮

同

餅搗に來る煤に成る

同

節季繰り越す天長節

同

河内縞着て金子の番

同

爐開に聞く蕙の雨

同

鯽と蛤置て去ぬ

同

扉にのこる梓弓

同

楠の一こ本神々し
名の吳竹にのこる桃

歴然んと
禮参り

位碑に耻じめ儒者の貧

書馬堂で駱駝そめられる

社務所でめでたかられてる

御砂返へしは夫婦連れ

脊に重ふ負ふ日野薬師

そ之部

同 同 同

空はれて

雨女子でもなかつてる

同

斧入れ止む雷が止む

同 其通り

嬉しう備ふ芋芒

同

嫁の合算譽める親

同

見て来た壬生を譽める孫

同 算盤持

媽に買ふこく長襦袢

同

しかと男子の答へする

同

笑顔して居る店をろし

同

財布の脈くこ徳利よむ

同

南天の葉を枯らしてる

同

商人癖がふけ散らす

同

高い媽じやとあされてる

同

折角の酒皆さます

空むいて

みよさの多々い穂がいはる

同

影に置く花にをく媽

同

鶴の涼しい浪天井

同

天窓撫てる鳥の糞

同

子に教しへてる天の川

同

青空譽る木蓮華

其手はくわぬ

鈍極めさゝぬ劔の峰

同

時代を質た彌陀買ぬ

同

かけ引きの藝が下素の知恵

同

狒々の藝妓に狸客

同

家康流の連帶者

同

碁にまけたかで金子貸さぬ

同

箔屋に縁のない丁稚

同

琴の音亂す花見の後

そわくこ

好きに氣のせく段階子

同

化粧部家出る花日和

同

嫁は氣づかぬ小間使

同

娘はへんじやのう婆さん

同

夫の重もりに子がほしい

同

嬉し處から嬉し玉章

そここしい

今朝も碇りの入る長家

同

妹とは琴の間へ入れぬ

同

疊障りもあらい下女

同

學校戻るこ市がたつ

同

門こ違ひする送り膳

同

薬は酒の外か入らぬ

同

多病な嫁を譏しる婆々

同

喜の字だけ手のあがる母

同

老を忘れて老か去ぬ

足る世の樂は富の外か

保險へ損んをかけつなく

同

捕虜が古郷戀しがる

同

恩賜いたゞく御大典

そしらぬ顔

這われた方も這ふた方も

同

落して立つた慈悲の鍵

同

車夫は宿屋の廻しもの

同

御門こ違ひこ猪口すねる

同

弱わ味噌が灸につよい事

侗に意見の張りがな

つ之部

月がよい

寝をしみしてる須磨の宿

同

母國懐かし空みてる

同

是に一聲きかまほし

同

腹鼓うつ芒原

同

上がりこむないわたし舟

同

尾花よりない野も名所

同

最ふ一ト砥添へ乳の後

月がよい

同

同

つんごして

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

食客の仕よい年の暮

別荘ひらきを秋にする

誕生の膳につく雑煮

まだ商法に馴れぬ髭

母のお福に似てぬ鼻

美しくしい下女氣に入らぬ

子等には優し女教員

來まさぬ君に減らす伽羅

ねつから羽織出しよらん

主人に鐵砲下女が打つ

粹な後妻が筐着ぬ

二年此かた聲撰らみ

教師がささす熊の咽ご

秋の日記に有る風流

蕙戸下ろす折りがな

こゝろない灯の見ゆる家

油團の針に心づく

同

同

同

同

同

月に二三度

同

同

同

同

つらい役

同

同

同

同

同

清い尼にも有るよこれ

噫てめめる梅の窓

そろ／＼帯が縮こなる

須磨に臨時の汽車が附く

渡たる橋とは誰がつけし

ふどしを影で洗ふ後家

献立買に出る山家

別家視察に来る顧問

乳々の禮に鯉持つて行

たよりしてくれたよくない

隠居してても見る帳簿

病後の介抱鬼になる

産む責任は嫁に有る

眼しばき出来ぬ京人形

貧乏けなりの金子の番

今泣かすのは末のため

小姑奉公せよと伯母

つらい役

同

慎しんで

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

月にむら雲

親と夫との板はさみ

嫁が浮世の楫握ぎる

佳節に菊の花活ける

亂れた髪は見せぬ嫁

天に任かした世を偲ふ

煙り立たさぬ御幸筋

妾とはみえぬ誰が眼にも

誠意溢るゝ天長節

影の供なごしたい妾

我が子に別かれ泣く實母

子によましてる米の札

軽るい報酬に重い任ん

信號せわしい交叉點

三方みて居る野犬狩り

縁ん無き衆生も法聞かす

昔し偲ばる花姿

捨子けなりうみる長者

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

連れが出来

達者自慢も誇られぬ

適の御越しに身が次きな

満れは欠けるこの別荘

女難んにかゝる卒業前

入院困まる米唐戸

友として居る指びが減る

帶勳の身が賣國奴

生木裂く様になる不肩

筆下だに置く雅の蕙

鯉丸なりて買ふ長家

吉原卒業する書生

平和する氣のない軍

博覽會へ行く日曜

乳母も運動さゝれてる

今朝こそ雪に轉ぶこも

橋こしてから氣が替わる

説教参りに下女附けぬ

ね之部

ねんごろに 機た下りてまで道教せる
 同 送くる繼子に言ひきかす
 同 簀灰にして居る介抱
 同 家庭教育嬉し嫁
 同 言ふてきかして人にする
 同 病む母厭ふてる孝子
 同 眼に幻しわ好の顔
 同 突つけた子が氣が、りな
 同 忘れてならぬ親の恩
 同 貧乏にまごふ金子の利子
 同 蚊張のさびしい忌中齋
 同 仕馴れぬ樂が退屈つな
 同 良心に罪み責めらるゝ
 同 名譽とりたい飛行凝り
 同 金子が多い程苦もつくる

願ひが叶ひ

同 産まぬ罪有る嫁が笑む
 同 粹な双親拜んでる
 同 醫者より母の見立笑む
 同 思惑地業やつて見る
 同 分からぬ病ひ治る嬢
 同 神のこゝろご合ふ契り
 同 子は軍籍に身をうつす
 同 焼け田見直す神の雨
 同 南天嬉しうへす介抱
 同 醫者そこのけの戀病
 同 師に勉強の筆が似る
 同 佛師の妙がいきて居る
 同 見合の化粧出來上る
 同 彫刻の龍もの凄い
 同 姉にこりてる聞合せ
 同 母問ふ文に税が増す
 同 細い職でも根んがよい

年忌が廻り

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

知恵囉ふ子が置き土産

佛間普請は孝納め

久しい國の伯母も来る

ちらばつた子が碑を建てる

破門の弟子の訛も聞く

招待状は不和でない

孝女は介抱してられぬ

苦界を競ふ姉妹

後の妹とに孝たのむ

中買いの居る梅畑

車夫は手拭結んでる

團体ごまる御堂附近

浮世小路に活けられる

簀入りも適母も適

萩の聲さく水主の妻

器械の成功祈る妻

體らだ鹿の子になる木賃

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

乳々のごぼしい子に苦勞

宿直が見てる古今集

宿替へすると後家が産む

重ごふ戻る俘虜船

言號ではないらしい

妾宅はらふ直り妻

的中したる熊の咽と

強い競争が通す的と

そちには餘程過ぎた聾

偽せ癢押した手を笑ふ

矢拾らひの子も射て落す

な之部

なりません

同

同

同

そりやお隣りは金子持じや

どうやら夕立ぬけたらし

大がいはかりの天王寺

すつてに無筆花しぼり

なりません

孤立覺悟の正義論ん

同

私たしが醫者に叱かられる

同

今年是非番らしい枝

同

和尙が捨さす巻田葉粉

成るやうにして

後家は世樂に狹ふ住む

同

譲り合すりや論はない

同

零落の今縁つける

同

貸した弱わ身が折れて出る

同

貧乏世帯も嫁の腕で

同

敵地へ這入りや強よい飛車

同

心の錦囉ふ嫁

同

料理屋でする合併式

同

母親の方は氣が弱い

同

孝女賣らさぬ醫者の慈悲

同

詠歌上げ合ふ七々七日

同

靈慰める集の花

同

同じ起證を見て笑ふ

同

同

出征の留主を助けてる

同

撰舉實意の運動する

詠められ

嫁は嬉しいはづかしい

同

兩側へ笑みする遼り妓

同

ひざ先かくす紅湯卷

同

燃へた蚊遣りにはづかしい

同

繼子がをしい箸放なす

同

癡兵の身は名の譽れ

同

賣らぬ美術は家の曠れ

同

帽子真深かに恥じる俘虜

同

戀の一字が命とり

同

家出の惣領冬給

同

青梅落す二尺尺し

同

入梅困つてる疝症病み

同

子屑一人りが家の恥じ

同

尻眼に針の有る繼母

同

本家へ眼がねかけに行く

同

何事も

何事も

遺言んこして諫めてる

同

運の足場さする辛抱

同

誤まる理より知らぬ嫁

同

佛間は虫の納め處こ

同

笑ふて済ます松の内

同

身の正直が出世種

同 馴染み買

田舎の客は義理堅い

同

閨が花魁の様ふでない

同

花魁の咄し世帯めく

同 なじみがい

船さしもとすわたし守

同

長壽を譽る穂長賣り

同

此樂しさが媽に有りや

同

宿の按摩に氣が置けぬ

同

最ふ山入れる料理店

同 何にもない

干物斷わる不漁つゞき

同

いつなとござれ執達吏

同

一と村哀れ出水跡

同

葉櫻で呑む折箱屋

同

棒鱈提げて小芋買ふ

同

令嬢がかばふ苦學生

ら之部

同 來客く

萩に坊丈の菓子が減る

同

車夫の案内は怪し宿

同

離宮は綺羅の金モール

同

赤前垂れが馬車迎かふ

同

たつた一聲おしい庵

同

涙で迎かふ盆んの月

同

聲が桑の葉七日苳る

同

電話かけてる別莊守り

同

鬼灯棚に置くおちよぼ

同

桑の塵掃く奥女中

同

茶代はすこふまわる客

同

自轉車ちよつと傍ばに置く

ラムネ呑む

幕の間凌のぐ夏芝居

同

うたれぬ瀧に汗が引く

同

十八番の譯けを問ふ

同 樂くな事

箸しより堅いもの持たぬ

同

昔しを偲ふ荷ない瘤

同

いつの眼覚めも響る乳母

同

菊の世話より用は無

同

箱根八里も夢で越す

同

貰ふた嫁が嫁らしい

同

帆はまだ風に貸して有る

同

仕事盛りの手が揃ろふ

同

据わりながらに鹵簿拜む

同

長の操が身に薫る

同 樂くは苦

産まぬ病ひは他にみえぬ

同

散り櫻みて淋びし妾

同

行く末案じてる石女

同

身のうへ咄しせぬ乳人

同

越し方思ふ妾も有る

同 落弟いして

學校で年が若ふなる

同

義員悔んで金子をしむ

同

弟に卑下をしてる兄

同

顔を草紙にしてもとる

同 樂になり

自然ん正々しうなる家庭

同

牛買ふてから知らぬ疝

同

喰ふだけのころ下々百姓

同

罪みの世きかぬ墨衣

同

すねた遊びに日を送くる

同

最ふ花みへぬ木槿垣

同

椅子退いて汲む雅の流れ

同 樂觀く

来る八起待つ七々轉ろび

同

根は長袖の人任かせ

同

御闊ほう笑む候補者

同

雷も眼下たの富士詣て

同

花壇んに我の壽も作る

樂人じや

積む善の果を喜悅する

同

羽織着た儘世を渡たる

同

喰いもせぬ魚釣りに行く

同

今日も糸爪の寸ん斗かる

同

年金喰てる糸爪垣

同

歌よむ外かに慾はない

同

廻はす曾孫に肩こらす

同

腰しかけた儘一晝う夜

同

酒より船で酔ふて居る

同

下戸の御座敷それたがる

同

今ん夜はむしてゆれぬ蚊張

同

出世仕過ぎりや愚痴が出る

同

手の遊んでる不仕合せ

同

流がす筏も晝にされる

同

惜しい盛りも日は浅さし

同

京阪乗り場涼しう見る

同

肱杖長く花の雨

同

情死未途が愚痴溢す

同

自轉ん車が婆々轉がし行

同

常の佛が酒に無い

同

元は美人の下女からじや

同

身に慘情の有る暴風

同

硝子燈見かへる階子賣り

同

詫びする家へ醫者むける

同

酒が癡狂にした櫻

同

虎が出よつて花の中

同

結いたての髪灰神樂

同

止まる水車に袖が浮く

む之部

同

睦まじい

同

蒲團の數のない若世

同

向かいの後家がけなりがる

同

飯々事ほどの世帯して

同

鴛鴦の眞似なげつない

睦まじい

同

無理言ふて

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

小姑の縁ん急かぬ嫁

知恵も借り合ふ嫁姑ご

借家の子供敵きにする

叱かれることも親の膝

髪まで潰す人形店

両手に乳房持ちながら

毛糸細工に困まる乳母

突けぬ妹とも手まり買ふ

介抱も醫者も困つてる

尼に浮世の返事さす

靴屋うごかぬ一年生

孝の深かさをはかる母

まだ罪みの有る菴の錠

我が徳にせぬ拾らひもの

鶉匠の腕でがやゝこしい

花に忘るゝ殻らの瓢

籠城から出す傳書鳩

同

むすんでる

同

同

同

同

同

同

同

むつくりこ

同

同

同

同

同

同

お俊ん傳兵衛に無理たのむ

娘の尻りを撫でる帯

帯のさま見に尻撫でる

柳戀しい留主の門ご

やの字の帯は御殿風俗

堪忍の紐うつむいて

文箱の紐をぬらす部家

一句よむ氣になる清水

花は薔みの言號

腕での血絞る義兄弟

尻りの格好も嫁入前

煙りに味じの有る名葉

種下ろしたいあの田ん地

生きた温石抱く隠居

ひねりくわいがをいでゝる

出た茸笑ふ娘連

私しの此瘤をかしかる

むつくりこ

雪が隠くした馬の糞

同

乳々が舞妓にして置ぬ

同

どうやらすると見えそうだ

同

青い切符の直打知る

同

雪の帽着た鬼瓦

無理言ふて

下座の鯛を借りに行く

同

雨に寝兼る草兜

同

道でない道通す戀

むつましい

家内帆になに舟になり

同

世から羨らやむ新世帯

同

榮かふる家は世の鏡み

同

齧て旅の新夫婦

同

無理に添わした縁が花

昔しから

神は誠この道照らす

同

尊き由緒所有る社

同

神の守護に國は無事

同

樹々も榮こふる神路山

同

達摩看板ん表具やの

同

笑ふではない是が式

同

仁義に富し我皇國

同

注連は絶やさぬ神の杉

同

帝の徳は日の如し

同

我が日の本は威が高い

同

口説た奴つが迫人乞ふ

無ねんばらし

弱氣が酒で言はしてる

同

居酒屋で腹らこしらへる

同

及ばぬ逆襲やつて見る

同

妾の寫眞針で突く

結びつけ

産ぶ着譽め人が歩行かさぬ

同

咽と疵づ曰く惜しい尼

同

やつぱり嘘でない見合

同

田植上手に筋がたつ

むらくこ

やつぱり嘘でない見合

むこ向いて

田植上手に筋がたつ

う之部

うるさいけれど秘術を盡くす紋日前
鶯の用夫に聞く

同 ところらのさびし孫の留主

同 子盛りがもふ實の母

同 衛生掃除は跡がよい

同 老先き思や子も大事

同 惚れた顔して金子絞る

同 居酒屋してりや是が客

同 産めば遣る氣になれぬ母

同 逃げた小鳥の惜しい妻

同 ちやんと活動になる演劇

同 麒麟も駕にをこる年

同 妾が恪氣する妾

同 空打つ砲も有る戦ん争

同 洋服く着せて有る案山子

同 髪より指びが噴れがまし

同 友は藻屑づの船な都合

運がつよい

うつり替り

同 大かい暖簾の跡と貰ふ
同 美人引き抜く驛女籤
同 都合よふ放なした怖い米
同 またぬ果報が流がれ込む
同 弾ん丸それた背負い柴
同 借證文で柱巻く
同 代替わりから出来る金子
同 千に一つは言ひあたる
同 疊む羽織に有る小皺わ
同 賣た獵師が野士笑ふ
同 娘と言ふも今日限ぎり
同 互がひに花の咲く見合
同 號外咄なし聞く盲ら
同 苺る日に近い稲見てる
同 大の字記るす子の額ひ
同 瑠理に輝く池の面も
同 拍掌の眼が横へ散る
同 美しくしい

美くしい

同

うろくと

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

尼宮惜しむ花戻り

なる程月は秋のもの

人の咄して日を送くる

樂人ながら樂してぬ

八巻して油とり

散歩して月譽める須摩

新米らしい出前持ち

かん者が兵糧荷のふてる

結構な道有りながら

珍ん客に氣のもめる嫁

露店見廻わる植木好き

這出が京の町探がす

色と慾に眼が覺めぬ

長者の苦勞歎く僧

落鮎の理を悟る妾

出征した身が國のため

公園になる城の跡こ

同 同 同 同 同

の之部

延び上り

同

同

同

同

同

同

同

同

同

昨日の筆が最ふ筐み

こもに見た花手向けてる

無量の樂くも假りの花

能衣裳賣る三代目

備へて貰ふ蓮になる

五厘の御客品好のみ

脊虫がやらい覗いてる

最ふ一つ身は着せさけぬ

最ふのしの字でない蔵

場當て上手な艶語り

薦がふたする書院窓

智譽て居る里歸り

驅徴院へ出す見舞狀

醫者に見せてる嚙まれ疵

うけ賃ん貰てつろふ聞く

のろけ
呑んで来て

白粉嗅い 經机

妻に機嫌を取る養子

拂らへぬ極わも酒嗅い

艸喰ろふ身の大かい事

箱屋丸こめてる娼妓

友にも知らず山清水

の、字一字が瘤にする

步哨が守る御一泊

まさかの舟も釣た村

小春日和に病干す

牛の鼻木を曲げて干す

敵き條視察してもごる

なみだいていてない順禮

海も人家も一と飛びに

大演習の困る雪

無錢旅行が杖減らす

京へ齡の杖が寄る

野越へ山越へ
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

のぶこい奴つ

土藏出してやりや手に合ぬ

延びちぢみ

櫃の飯んまで喰た盗人

同

髪結こまる髪の癖せ

同

胃袋三度活動さす

同

情夫の罌丸氣が弱い

同

昆布屋の納家へ雨が洩る

同

孫ご脊競らべ笑ふ老

同

安い莫大とは違ふ

同

不旬んに狂ふ花曆

同

氣の置床に有る壽命

野も山も

一望千里飛行界

同

餘まる程有る大地主

同

皆寶なり親の恩

同

簞笥に入れて遭る不容顔

同

花孕らまして春の雨

同

吸い込むちから有る齧

同

月は隔だてのない景色

野も山も

廣ふ名を賣る都紅

同

多額納税の所得主

呑むにのまれぬ大鮎につく鵜の齒形

同

どの酒屋にも借りだらけ

同

酒樽見てる俘虜兵

同

起きてる店は借りが有る

同

稽古したかて大嫌らい

同

モルヒネ惚れた客でない

同

熊野烏が恐ろしい

同

酒より米に追われてる

軒に立ち

呵責にすゝり泣く實母

同

母ははしらず報謝乞ふ

同

子にだけは縁ん切れてない

同

疲せ蚊肥しに来る恪氣

同

不孝の訛に僧て來る

同

陸くに居る様な島巡り

同

道に隙こる春の旅

同

花満開の日がつゞく

同

うぶな親出に金子かける

同

遊んで居ても肩が凝る

同

なるほとしだれ柳じやなあ

く之部

雲に入り

不二半分は畫の手抜き

同

無常の風さ西へ行く

同

傘屋の損んわ最ふ見えぬ

同

儘なちぬ世を見せぬ月

同

梢へにみえぬ社頭の杉

同

拍掌の鳴る所澤

同

最ふ引き鶴は眼の名残り

同

桃中軒の弟子こなる

同

日車どちら向いて咲く

同

硝子拭いても機械室

同

今日は哇迄春連れる

同 瀧近い菴稀れに見る
 同 嫁の多忙を知る鏡み
 同 靈場の瀧は日がさゝぬ
 同 秋の仕舞へぬ門と庭
 同 なければならぬ金子と寝る
 同 問屋へすまぬ留主遣ふ
 同 質屋へ來てる悉皆屋
 同 大禮服もころす髭
 同 嫌らいの手先握ざる癩
 同 人形師の手がこんで有る
 同 のびる噂さに聳がない
 同 彦根の筆屋煽てゝる
 同 生蕃人の誇る棚
 同 案山子打ち死にさす酒屋
 同 大切にせい我れの印ん
 同 民籍望む御公達
 同 牡丹餅じやかて丸で牛

同 大食自慢んさらす侗
 同 食客が夫婦喧嘩種
 同 歌手男根たけ強よい磨呂
 同 畫師に姿を拾らわれる
 同 寫眞とらして賃貰ふ
 同 畫に拾らわれる姉妹
 同 衣裳に淺黄繻子着せる
 同 身を光榮がる御陵守り
 同 白齒一人りは出代わらぬ
 同 針で喰ふとは後家の嘘
 同 去んでたもでもない節季
 同 師でも親でも屁の如し
 同 をれの氣にすりや雪隠虫
 同 金子が出来たら元の伯父
 同 強盜跋躐にして去なす
 同 いつまでふごし持つものか
 同 勵げみの的になる耻辱

同 同

笑らひ止んだら俵は持てる
銃杖にして擔架蹴る
沓磨がかして蹴りさらす
病ひ打ち抜く大灸こ
虫の好く事さして置け
味噌汁焚かす田葉粉好き
肺に適き當は濱空氣
色抜いてから弱わる生地
信の届いた溪の水
夜袂けの尻を貧乏神
蚤が中風の手を笑ろふ
直段も足に合ふた靴
入れ齒はづれた後家の干話
接いた椿が二種に咲く
旦那喰て居る下女の蚤
補充ながらも守る民
勵め盡くせの勅り

同 同

買是業に本走する
決死を志願して進々む

や之部

やつしてゐる
同 同 やくたいく
同 同

在いの妹ごも縁ん盛り
寡に何んや出来たらし
天恵に溝の有る男
風呂のつめ抜く糠袋
雪隠も井戸もづい撫でしや
盗み喰いした腹らに泣く
隠くす娘の乳が黒い
火吹竹借る樽拾らひ
野壺へ落た螢籠
不幸つゞきに残る婆々
やつぱりそうか冤つの罪みにない曇り
臨時休業する銀行
女食客に譯けが有る

やつぱりそうだ妊娠なればうごく筈づ
 金子が出てから明かぬ家
 木の芽一こ枝折つて遣る
 髭を剃りこふなる月給

同 三圓づゝにならぬ妾

同 我が作る事思て見りや
 同 便ん利を響る電報料

同 やいて居る
 同 氣味わるふ買ふ質流がれ
 同 下た着ばかりが皺わだらけ

同 車夫が満員電車みて
 同 煙りの目だつ蔵山

同 同 同 同
 同 まだ御客氣の過かぬ情夫
 同 世のはかなさを知る煙り

同 嘘も土産も喰わぬ媽
 同 灸醫の惜しむ雪の肌だ

同 やすくご
 同 七日目に去ぬ里の母
 同 戀の苦勞は子は知らぬ

同 やすくご
 同 乳々より外にない寝顔

同 同 同 同
 同 歸朝羨がのふ祝ふてる
 同 有りがたい世に壽を延ばす

同 望み産まして禪きこる
 同 田から戻りて世繼産む

同 同 同 同
 同 留主に身二つみて貰ふ
 同 粥杖嬉しう受ける嫁

同 やらかいなあ
 同 手の豆とれた職くの隙ま
 同 あんな容顔を持ちながら

同 火で焼きや鐵も飴の様な
 同 釜底の方は隠居飯し

同 やたて出し
 同 手に注文を書く丁稚
 同 今年竹よむ藪の主

同 同 同 同
 同 雲きれる迄裾野書く
 同 ホテルの下女に笑らわれる

同 同 同 同
 同 板の中さす材木屋
 同 雅人が受ける瀧しぶき

やたて出し
山越へて

姫路産れが自慢吐く

河閨梨の腰を押し歩行く

焼き飯し京で喰てる伯母

出世の出来るゆめらしい

川の字くづす穴賢こ

端書の安い一軒家

罪みの深入りする遊獵

荷は京でする嫁が来る

柚の子譽めて居る校長

またから覗く與謝の景

生徒が朝の空気吸ふ

瓢は麓の茶店へ置く

運の下だりは知らぬ米

ま之部

迷ひがはれ

益すく禪家歸依する

同

豫讓もどきに裂く起證

迷ひがはれ

最ふ辻占に錢出さぬ

同

妻にも合わす顔がない

同

觸髅みてから氣も替わる

同

眞如の月が産れ出る

同

手遅れてから宗旨退く

同

我が短慮泣く乳々貰らい

同

俱に死すとの實に添ふ

同

弗子で拂ふ世の塵り

同

美女の揃ろふた鏡み山

同

薄ぐらい灯がはづかしい

同

姦しかつた場が沈む

同

女便ん所で三番叟

同

本物にする連鎖劇

同

電氣の消へた活動館

同

子は手を鳴らしてる線ん香

同

家代々の下女がしら

同

陶器竈場へつく割木

同

同

松 同 同 同 迷ふてる

同 同 同 同 同 真似でけぬ

四季を兼てる床の軸
 湖水渡りの名が高い
 年はよつても花は咲く
 落葉搔いてもめでたがる
 建石際で明き盲ら
 まだ荒ら壁で有る茶の間
 我れを山路の呼ぶ子鳥
 ごつちへ眉毛落こそやら
 まだ縮緬んは白の儘
 虫の好く方へ行きや貧乏
 伐る手の間とる花鋏み
 我が子ながらも氣質だけ
 變人じやこて笑ろふけこ
 專賣權んの有る機械
 首捻つても足らぬ知恵
 表具にしたい無心狀
 いつも勝利は日の國旗

同 同 同 同 待つて居られん

同 同 同 同 同 参つて居ります

先づく是へ

藝は道くで徳が有る
 赤心だけでない勇婦
 優等で出る盲啞院
 藝子も轉かす大かい腰し
 待つて居られん妻こ言われない命
 終の製造に寄る夫婦
 母が産婆の代理する
 丁稚の這入る上雪隠
 返濟も其顔で來い
 双方息きが合ふてない
 月給が下がりや拂ひ遣ろ
 よい知恵が出たかして遣ろ
 牛だけ乗せた渡し舟
 参つて居ります日野土産出す里の母
 御利益くの後は猶さらに
 事のふ早い太郎冠者
 舊主いざのふ放なれ巷

先づく是へ

貴人案内する牡丹

同

立ち咄しにはさゝぬ春

同

上座を譲る本家筋

同

御下車導引く驛長室

まいて居る

婆々はしつかり腹らに臍そ

同

釣鐘の中戀しさに

同

鳥羽書に權兵衛こつて書く

同

降参の意を示す犬

花表を建た祝ひ餅

け之部

毛がはへて

産婆もぞつこ獵師の子

同

拾ふた御玉暖たかい

同

母に任かさぬ化粧品ん

同

最ふ妹ごにもして置けぬ

同

下戸は鮎鮎風邪引かす

是から守りに困まる乳母

検査濟み

同

新酒の利き出す酒屋

同

家方へ大手ふる娼妓

同

精肉しかご判押せる

同

名は天然の氷賣る

景色見て

漸うく根だ張る出水跡と

同

磯道隙まのいる行脚

同

秀句よみたい慾も出る

同

松の洒落ぶり寫す畫師

同

築港で廻わす遠眼がね

同

腰の扇に筆染める

同

總出して居る靱筵

煙たいく

絹着る老に有る荷瘤

同

喧嘩笑らいに伯父が来る

同

醫者より里の方が薬り

同

隠居隠居で居てほしい

同

親指び見せて連れ去なす

今日は吉

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

決心んして

鳥影を笑む窓明かり

鬻も桃割結ふ舞子

熊手買ふてる寶市

卯の羽似やがる初裕

萬歳祝ふ紀元節

疑たがいはれた豫審廷

餅蒔もする船な卸し

殖やす家督の山みてる

日和都合よく秋仕舞ふ

そんな怪やしい猪口持ため

家督の山にもたれてる

嫁まで孝行朱に交る

金子にあかして有る普請

澤山の子にくづがない

年く殖へる所得税

錦着るまで見返へらぬ

一の子分に跡と頼む

決心して

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

忠義は雪に陣太鼓

仇だに抱かれて寝る白刃

家出はしたが親戀し

辞表片手に意見吐く

西を枕にする鯨

召集令状待つ豫備

震ひの止まる女膽

偵察に出る飛行隊

兵士ばかりの臨時汽車

探がす畫筆は猿が持つ

遊獵咎める御陵守り

馬士が謠いの跡諷ふ

娘裂いては喰わぬ父

家令の迎こふ奴質

繼母が不埒ち持ちつける

請取りどれも忤の手

花嫁見えぬ婚禮の座

同

家督戻してくれぬ伯父

ふ之部

不仕合せ

分けた血のない身を悔む

同

此子は親のひざ知らぬ

同

松の位いて内輪練る

同

一ご人息子が戦ん死する

同

乳呑子抱て媽に行く

船にのり

入聲大かい柱たて

同

娘に海は臨ぞかさぬ

同

海士の夫とは子守りうた

同

平家一門ん皆藻屑

同

芦間の月の趣味はかる

同

凱旋の兵が日を拜がむ

同

島の豪家を荒らす賊

同

川向かいまで来た蝨

不仕合せ

涙だながらに田地賣る

同

兄の世帯へ子と戻る

同

子にも孫にも先きたれ

同

妬み恐れて尼望む

同

十徳着てる簞賣

同

渡航して賣る國の耻じ

同

智に喰われた三つ衣裳

同

乳母を出雲の神の様に

伏し拜み

誠忠の泣く橋の上

同

立聞きが泣く親ごゝろ

同

來迎佛に眼をひらく

同

小包み明けて古郷向く

同

尼になる子が尼泣かす

同

納税額が地租に多い

福は外こ

嫁入り惜しむ甘酒屋

同

夢の買人を奉る

同

働らけば皆内へ入る

同

寝て、果報が来るものか

福は外と
殖へて来た

軒で老舗た關ん東煮屋
爵位の榮も有る實つ業
遊敷き足す奉納相撲

同

蛤捨て汐逃げる

同

池いつばいになつた蓮

同

二見の岩を浮雲かな

同

水見る橋の人拂ろふ

同

堤みへ添わす柳伐る

同

新家にも有る撰擧權ン

同

今年の祭り廣ふ呼ぶ

同

檢皮の塵も有る社内

同

假り橋の方に往來さす

同

茶の間くづした養子の世

同

こけら落としわ揃ふ顔

同

大きなちらし出す銀行

同

見越しの松もほしうなる

同

樋に立ちむこふ合併村

蒲團だし 選文

泊まつて夫まご師團問ふ

同

足藝の太夫あを向かす

同

鳥の首出す藤の棚

同

よい風譽めた橋そしる

同

風も柳の骨へ吹く

同

里の母から胼薬り

同

百姓の口は暖かい

同

園内の猿かじけてる

同

來珍時間ん夜に延ばす

同

居候の猫も有る綿屋

同

婆々が老舗た白酒屋

同

湖みの景に添ふ箱根山

こ之部

同

萩かけてする出開帳

同

渡し場に賣る艸の餅

尺魔恐れて急ぐ嫁

頃もよし

額たひ叩いた酒の味

同

銀貨も交じるわたし賃

同

夜打をかける下女の寝間

同

媒人が二人そつこ呼ぶ

これ見よがし

勝馬引て鳴尾去ぬ

同

不拂ひ曝らす魚問屋

同

湯戻り早い小姑

同

登山記出す女記者

同

伯父を上座に家振舞

同

切戸明けとく菊天狗

御尤

譯け聞て見りや一理有り

同

八瀬は四十もまだ童子

同

堪忍袋痛めさす

同

理は人の眼に有る鏡み

同

主人に返へす口ちはない

同

病む眼に乳母も俱涙

同

誤解いのはれる算違ひ

同

胸突きつける稽古臺

同

地を固ためてる新市街

同

汗拭ぐひまもない御茶師

同

熔爐師が茶の行儀こる

同

芭蕉の露を墨にする

同

かけ取り去なす媽の辯ン

同

横腹らへ灸すへられる

同

足しもないのに起き上がる

同

ちから仕事も樂くが有る

同

風の子が笑む雪丸け

同

隠居は馴れぬ耳掃除

同

惜しい淨瑠璃聞かぬ後家

同

屑買い變んに思ふ賊く

同

好きに岩戸をひらかれる

同

そりや私たしのと云へぬ櫛

同

昔し語たらぬ粹の果て

同 轉ろがして

同 こそばいく

こそばい〜
こえがよい

疵持つ足の高い椅子
今に一樹の花が咲く

同

おかる語りはきやつ一人り

同

鈴虫と名のつく藝子

同

殊に短じが夜惜しむ鳥

同

千枚とじと言ふ太夫

同

喇叭わふかぬ豆腐賣

同 極樂じや

顔に似合ぬ後家殺ろし

同

按摩半分知らぬゆめ

同

親子三人で水いらす

同

説教戻りに嫁賞る

同

佛問我が世の老女夫

同

餘所の夕立の貫らひ風

同

門きが最ふ男斷り

同

釣竿焚いた火にあたる

同

雪道に酒最ふ飲まぬ

同

文も寫眞も灰にする

同

膝の痺れる追い込み場

同

失敗いをした空相場

同

南京虫の多い大坂

同

天下を望む天一坊

同

乳母はぬからぬ直り妻

同

文は英語で女學生

同

心にこゝろ咎められ

同

妹ご書て置く宿帳

同

其場のがれは天の網

同

世界さわがすチゴマ團

えゑ之部

回向して

朝な夕なにこもる鉦

同

僧の千む古戦ん場

同

留主は淋びしうない繼子

同

靈は追弔の座へ招く

同

歌はよみ世の有る櫻

同 回向して

同 同

同 縁じやなあ

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 笑みふくみ

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

弟子が口ちく師を惜しむ

繼母の留守に父泣かす

嫁は涙の乳々絞る

門と違ひした這出置く

寝物語りに親子知る

紋ん迄母ご同じ嫁

芒焚いてる花魁果て

異人の膝さを退かぬ狎ン

慈悲で拾ろふた子にかゝる

瀧守りとなる鯉摺かみ

辛度かつたと鬢ん直す

泣き婆々にたつ妙な媽

横抱きて去ぬ乳々貰らひ

農結構がる秋仕舞

寫眞一枚臍その蓋た

繩取躊躇さす毒婦

全盛の愛を出す寫眞

同

永代のこり

同

同

同

同

同

得手に帆

同

同

同

同

同

同

同

母に返事をうなづかす

燈明輝く彌陀の池

家の譽れこなる勳章

本堂の脇きに像祭る

一建立の鐘樓堂

施主の輝く常夜燈

楠公の遺蹟世に朽ちぬ

過去帳數々有る舊ウ家

留守たのまれた下女番頭

上戸が爛ん場たのまれる

置酒ごつて餅搗かぬ

酒で呑めごはよい薬り

好きな男にくどかれる

禪きは土俵だけかける

たのまれぬかて仕たい留守

虎は藪なら千里越す

騎兵戻りが乗る競馬

得手に帆

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

出齒り澤山餅貰ろた

席き借り先きも謠い好き

出齒が炬燵を明けに来る

後家が立て膝して見せる

天恵割りなら喰いまけん

一ご里めだつ柿の照り

産科教授仕にくがる

羅漢にしては稀れな顔

無筆一人りに有る覺へ

長閑過ぎたらみえぬ不二

白瀧染める夕紅葉

化粧のうすい内妾

縞の羽織が椅子借らぬ

私生の母が見舞辭す

塵紙で鶴折る繼子

嫁は八日も仕舞風呂

悪るい合性が睦まじい

ゑらいく

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

牛も吐息きの綿の花

もふ戸のさんを持ちよらん

百度に近かい寒暖計

初産の子が落してぬ

鶏も土用は玉産まぬ

こゝろ見と言ふ坂じゃけな

汗になる茶を畦で飲む

芦荊りらしい女棹

暫ばし忘るゝ旅の憂

何に漁るやら鷺四五羽

苦煙り立つかゞり舟

寫生にも乗る藻がり船

八方美人が勝利得る

一家こそぞつてかのへ申

候補議員は在いの伊豆

て之部

敵がない

同

同

敵がない

儲けのぼろい特許權ン

同

そげ抜き薬り誇つてる

手間入れ損ん

目のない石を思ひ切る

同

しつにくいに灰利いて無い

同

上戸ごしらず草の餅

同

竈に負傷をした人形

同

名だけ松茸山らしい

同

日の軍旗立つ入城式

同

自慢んせぬ身に奥が有る

同

身は銅像になる譽れ

同

紀念にのこす聯隊旗

同

凱旋の兵勇ましい

同

玄武門から名が賣れる

同

名譽の花を國土産

同

關の脊中の砂拂ふ

同

親まで村で名が高い

同

射とめて驚き山下りる

天の與たへ

我が運ながら恐ろしい

同

不作の村は多々い漁

同

金子が降る様な今日の雨

同

義捐出す身をけつこうがる

同

隣りで貰ろふ乳々が有る

同

怒濤乗り切る水雷艇

同

子を埋む地に釜が出る

同

八起の運に泳ぎつく

手を廣げ

杖突く松の若緑り

同

甚句士俵に一興有り

同

棚一つばいに藤の花

同

たけた蕨は仕様がない

同

乳母の膝さまで歩行き初め

同

松竹と言ふ劇場主

同

牛一疋ですき切れぬ

同

是みてくれこ出す百姓

同

抱かれない氣が春に有る

手を廣げ
てんごひま

遠巻きしてゐる湖みの舩
乾く人參見てる猿

同

煙管奇麗にして女郎
霜枯と言ひ納税月

同

鼠が落すまねき猫
焼芋自前買ふおちよぼ

同

かたげた櫻木戸が見る
豊年ご知る口入屋

同

恨らむ亡者の多々い醫者
正直の身にやみはない

天の助け
同

待ち兼た田に月が浮く
鮓屋へ馬蘭借りに来る

手習らひに
同

一つ身持たす裁縫生
京の町名を知る這出

同

八十の筆も徳がつく
師匠の肩たを借る按摩

同

右ご左りに這入る風呂
亭主にわかれ

亭主に別れ

浮世吊ふ花の尼

同

子の教育くに餘念んない
酒屋から來ぬ酒の粕

同

蜘蛛の巣が張る化粧部家
髪は飾らぬ未亡人

同

筆筒明けるご愚痴が出る
男勝りで稼ぎ出す

同

髪結是で金子延ばす
結句規則のたつ子方

あ之部

あきれてる

寸憐買ふ毎とに直が上がる

同

給仕の眼にも瘦せ坊主

同

不二見る度びに畫が嵩む
拾ろた包みが皆んな紙幣

同

尋ねる山は雲のうへ
鬼の女房が般若ごは

合性よし

金婚式も無事に済む

同

親は容顔にない望み

同

易断嬉しう出る二人り

穴かしこ

釋迦も達摩も去ぬ古郷

同

宿坊の手に入つた後家

同

狐の根つき格子がなあ

同

言ふだけ言へば終はない

同

年んの明いてる金子の番

同

綸んが鳴つたらもふ仕舞

同

蟹は居よらぬ秋の風

同

引導は鯁が授けてる

秋らしい

百日咲た花が散る

同

南隣りへ桐一こ葉

同

縫子の減らす在の師匠

同

桓根に鶏の居る掛地

同

虫に障つた便り聞く

あやしいなあ

脊中叩いて粹きかす

あやしいなあ

高い賃ごる渡し守

同

斥候が土に耳あてる

同

失せものゝ眼が下女に付く

同

一人りつゝ出る士藏の用

同

板場が龜の甲隠くす

同

蓮池譽て尼が去ぬ

同

女食客が粹過ぎる

歩行きごをし

強よい靴履く日銭賃

同

涙だご金子が彌陀に降る

同

悟道を辿る行脚僧

同

京まで替へる秋の水

同

阿闍梨の供がよわつてる

新らしい

盲らの杖を哀れがる

同

鯉のあばらに浪が打つ

同

餅蒔た舟漕ぎ初める

同

まだ佛壇に有る位碑

同

雄松で鮎の味じ譽る

新らしい 百圓紙幣は樂くしてゐる
 同 過去帳に法名書き添へる
 あほらしい 媽の名を言ふ保護願がひ
 同 私たしや人形にしられてゐる
 同 風呂屋を覗く大丁稚
 同 折りに鞍馬へ借られてゐる
 同 俄師ならばこそ座長
 あつくろしい よこれ目みえぬ貸浴衣
 同 縫もつさりと結の襟
 同 寢酒相伴せぬ食客
 同 團扇たりとも畫が大事
 同 幫間が弟子連れて來る
 姉たより しこの針によりもどす
 同 爺が違ふと氣も違ふ
 同 針山にない木綿縫い
 同 母は留主でも子は泣かぬ
 同 押繪の裓はしてもらふ

赤い

西瓜屋が首とりに来る

同

翌日は鱒の取れる雲

同

長岡の池もへそうな

あわよくば

跡もお娘もいたゞく氣

同

思ひ違ひが濱覗く

同

侗は自慢んの蝮指

同

過ぎた相人につい立たぬ

同

息き有るうちと急ぐ汽車

さ之部

盛りじやなあ

朝風呂の湧く花の里

同

文武に嵩む地方税

同

短冊に花譽て去ぬ

同

博士を雇ふ請負師

同

大かい嘘めも出来ぬ芥子

同

どの煙筒も立つ煙り

同

六田の舟にも花の塵

同

人に知恵貸す四十男

同

獅々が出そふな長廊下

同

見らるゝも花見るも花

坂登り

家も世帯も楽になる

同

肩に乗るだけ牛助ける

同

ふり返へり見りや松一里

同

悉陀太夫の憂き別かれ

同

順禮の押す母の尻り

同

汗が涙か泣き不動

同

子數樂しうなる世帯

同

辛抱が金子になる養子

同

本堂の御屋根みえて來た

同

皆立つまいぞ渡し舟

同

焚き附けられて笑ふ嫁

同

室叱かられる赤切符

同

算違いして天惠搔く

同

煽だてに乗らぬ苦勞人

同

そりや我が輩がかん違ひ

同

尻りに敷くだけ稼ぐ媽

同

見ぬ親の藝に癖も似る

同

仕替へ直高い京女郎

同

雷りの子が臍を盗む

同

零落しても氣は高尚

同

五節の舞は京の姫

同

遠音の違ごふ師の鼓み

同

西陣だけの美術織り

同

級長の鞠りに仇はない

同

手管は凄い姉仕込み

同

愛宕詣りはのこる姉

同

すだれ下ろさす花の茶店

同

代藝の方があたつてる

同

別家に同業ゆるされぬ

同

渡航めん状のゆりぬ肺

同

笑ふは梅の花ばかり

同

さむい

さむいく

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

不孝今頃どうしてる

媽よ一本んつけてくれ

噓めして買ふへフリ丸

何んぼ降るとも知れぬ雪

龍の口から氷柱吐く

村正ぞつと見る鑑定

夫まの禁酒に心吸む

縦覧の札菊に出す

車返へせこのべ賜ふ

通りぬけさす造幣局

萩はさびしう賑ざわしい

観櫻御宴の沙汰も有る

極樂の様な巨掠池

蝶漂よわす花の浪

参宮戻りを梅が呼ぶ

公園にあく椅子がない

藤のまばゆい神の池

同 同

き之部

昨ふいふ

同

同

き、わけて

同

同

同

同

同

同

機嫌よふ

同

同

同

散らぬ間を急ぐ親心
順禮の賞める廿日草

まだ通用のする切符
送つた我が送られる

花に吹く風人も有る
手で咄しする姫と啞

我が身は沈み親浮かす
親の教へは身の定木

嫁も笑顔で出征さす
望みの苦勞さして見る

酒仲買が直を絞る
不自由苦にせぬ俱稼ぎ

二年勤めて鉄握ぎる
保険が無事に手にもどる

歸朝の兄と握手する

嫌機よふ

同

木が太り

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

泣いた波止場の嬉し嫁

初孫抱て寫真こる

眞夏も瀧が細ふない

搦らんだ藤も噛まれてる

埃りの斷り柿でする

家督代々結構がる

廂し縮ぢめる上雪隠

記者も加へる聯隊長

智にする氣の學資繼ぐ

妹との年も問ふ樓主

村中が補助する學資

一人りの弟子に眼がこまる

短柵にとる郭公

悪く事千里ごやら言ふて

まだ卵の花は咲かんのに

売らで渡しを漕て來る

跡こ戻りする金魚賣り

きたぞく

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

賣るなら今じや圍い米

物は言わねどまねき猫

鯨は元の海で死ぬ

社日が濟むと燕見る

小遣かいくれと營所から

今度は逃がす運でない

自動車常在驚かす

死に目に逢つた姉妹

女房の櫛の齒で喰てる

鏡臺の前へ小半ん日

利の利で遊ぶ差し向かひ

渴ごる世知らぬ笥水

酒の有る日は筆持たぬ

持つもの持つて堅い後家

盥で登城してござる

日數薬りになる喧嘩

倭言葉さゝ覺へ

きさんじな

下駄の下た掃く初い奉公

同

汽車に乗つても汽車の眞似

同

麥で育つた子がもどる

同

禿の眼見へほたへてる

同

這出中々つかいよい

きつしりと

汽車も電車も御大典

同

實母が辨當見て拜がむ

同

どちらにも馴れた合砦

同

四季の揃ふて有る箆笥

同

貨車も客車も皆俘虜

同

お多福に衣裳つめて遣る

きみがわるい

青臭い風吹く溪間

同

夜は燈籠も心経病む

ゆ之部

雪が降り

跡花にした朝迎ひ

同

國では見えぬ芭蕉の實

同

海だけ早ふ日が暮れる

同

暮れの渡しは又一人り

同

急かるゝ炭の荷が出せぬ

同

夫とはさぞご車夫の媽

同

穴の準備は出来た熊

同

小役のあてる母の癢

同

伏見を無事に越す子持

同

黒い方の犬連れる獵

同

宙返へりする飛行隊

同

隠くし藝の出る無禮講

同

取れ秋の米富士に積む

同

鱗の光かる網たぐる

同

古稀に薬の味じ知らぬ

同

寫眞屋へ行く二人り連れ

同

いづれ手に入る花見てる

同

三味借りに遣りや弾に来る

いつ下たつも保津舟

愉快いじやな
油断大敵

落藉れて酔ふ園遊會
講和中でも解かぬ守備
馴れぬ間は怪我せなんだに

同

白ふ見えても黒鼠

同

沖へ舟漕ぐ秘密會
起き番に碁はうたさゝぬ

同

白持つた方がまけそうな

同

深切つらしい旅の連れ
獵人が谷眼を配ばる

同

ゆめではないか
戦ん死は誤報無事確報
別荘住居の母こなる

同

乳母に引かるゝ庭造り
債券出して見る番號
好きと二人りて洋行とは

同

大逆徒も娑婆へ出る
漂流者が逢ふ領事館

同

仕さしの押繪かなし母

同

そちらの客も喰らはんか
汽車の窓から見せる不二

同

終點ですこ言ふ車掌
孫へ土産の吠喇ふく

同

雨になるのか此地震
適の逢ふ瀬の恨らみ言ふ

同

雪拂ふてる庭の竹
豪農が迎かふ花の春

同

尺で客呼ぶ呉服店
大家は大家らしい風

同

究屈つ咄なし廓でする
洋行戻りが親貢ぐ

同

打襠まばゆがる衣桁
名の祭り見る加茂堤み

同

其名には似ぬ姥櫻
金波銀波の打つ日の出

同

どれもをとらぬ押繪額

優美な事

ゆりおこし

ゆつくりと

優美な事
浴衣着て

使かい待たして帛砂見る
花樂に賣る涼み船

同

踊り子の出る暮れの鐘

同

碁相人の來る湯治宿

湯がぬるい

まだ虫の子が死によらん

同

宇治のこゝろ味是でよい

同

神田訛りの氣に入らぬ

夕暮れに

春の子へ急ぐ哇戻る

同

旅も氣のよい日和虹

同

車で柳潜り込む

祝

船に仕たてた鯉節

同

拍子木の様な牡丹餅

同

施主が浦島嬉し舞ふ

め之部

めでたいく

箏笛一と棹樓主から

同

陛下ごしての御着帯

同

指び折る友のない齡

同

骨まで赤こふした扇

同

觸髅を竹にさす和尙

めつきりこ

母への文も廊駈れる

同

耳も潰ぶれて手も出來た

同

薄毛がはへりや氣もませる

同

全盛の果てがせわ女房

同

青麥に知る日のゆとり

面冠り

箱の中から出て舞ふ子

同

胡麻ふりかけて春にする

眼にも物見せ

潜つた股たの肩越へる

同

隣りの青樓で居つゞける

同

證據は是と拾らひ文

同

小庭で情夫の羽織踏む

同

折り提げた手が野で現つ

めでたいく

代々畫像皆白髮

同

保險會社に損んさゝぬ

めでたいく

我が壽に重む孫の數

同

残らずつめた米俵

同

民も敬賀の即位式

眼にとまり

鷹野が縁んとなる出世

同

いやでも叱かる役で有る

同

酌婦廢業の届け出す

同

惣揚げの翌日一人り呼ぶ

同

踊りからよい客がつく

同

網にきらくしてる鮎

眼を覺まし

筆は多い垣の花

同

元の女房に惚れ戻る

同

最ふ村正は奉納する

同

縁んの切れ目は金子がない

同

雪ご聞く子が勇んでる

めがたかけ

針を通しに炬燵出る

同

待たした鑑定する隠居

同

新聞よむご根んがよい

眼がみえぬ

様文字だけの車止

同

毛糸の頭巾上げてやる

同

本堂下りるもつたひ繩

同

因縁んごよい琵琶の筋

同

杜杵は險查の不合格

同

ちよ方かられる文使

眼がねかけ

飛行の動作見る將校

同

可愛さ孫の足袋綴る

同

老も時局くに眼を通す

同

嫁が仕立てた穴探がす

同

接木の根んは年寄らぬ

同

まだげた覺へ有る隠居

めんぼくない

施行主へは顔上げぬ

同

驚く罪みは我に有る

面ン脱で

懺悔して居る嫁をとし

同

樂家で拭ふ顔の汗

同

問へば其場で徳拾ろふ

同

面つらン悦よろこて

高たかい敷しき居いても低ひかう越こす

めつそうな

弟あにとに佛ぶつ問もん諭ごんす嫁よめ

同

乳ちち母ははが筆ふでこる金かね屏びん風ふう

同

禮れい言ごんわるゝと氣き術じゆつつない

同

豆まめの葉はじやかかて幼こ女によ諭ごんす

眼め尻しりりさ下さげ

洗せん濯じやくに雲くもふみはづし

同

枕まくら探たずがしをだ抱かいた客きやく

み之部

未み開ひらいく

異い人じんをこめる宿しゆくがない

同

風ふう呂りよもきわるい間いの驛

同

漁りよ村むらにとばし貯ちよ蓄ちく心しん

見みたいばかり

藝げはうわの空そら上うわ棧敷しき

同

出しゆつ世せ仕し過すぎのかなし母

同

いらぬ敷しき島しま買かひに行ゆく

同

寒さむい障さう子じもみける梅うめ

同

また子の縁んは切きれぬ母はは

同

孫まごに山やま越こす里さとの母はは

同

盲めくららの寝ね言ごん不ふ憫びんかる

同

寫しゃ眞しん急きふいてる言ごん號ごう

みこむない

親おや父ちち旗はた持もち媽かあ大だい將じやう

同

田いな舍か式しき部ぶが手て鼻びなかむ

同

座ざ長ちやうに外そとに輪わ叱しかられる

同

下げ女によがうつくし過するので

同

田でん地ちつけても縁えんんが遠とい

同

中なかでして遣やる腰こし縫ぬい上うげ

同

あの鼻はなあの頬ほあの額ひたいたひ

同

横よこから見みるこ鼻はなはない

同

軒のきの薄うす着ぎをよ呼よび入れる

同

鸚ひい鵒わ返かへしの小姑こめ

水みづあけて

同

舞まわ妓ぎは影かげの舌したをだ出だす

同

活いけ花はなりんと祇ぎ園えんの會え

同

夏なつも温あたた泉せん賑にぎわしい

まさが御み堂だうの用よう意い有あり

水あげて
味噌つけて

御客とり込む氷店

箱の追わるゝ花の山

斯うなりや耻も賣りついで

豆腐珍らしう春は行

待つてましたご御翠下ろす

氣隨料の添ふ媽に飽く

初日の關が砂だらけ

英語を習ふ骨董商

遺言ん一人りつゝ遠こふ

支離指びさす臨終際

宵いに忘れた癪起す

割つた瓢への雫吸ふ

中から上げる駕の垂れ

髪切つた媽持ち直す

是はご僕くは去なぬ花

不義した媽に虫がよい

何處まで送る國の母

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

未練んが有り

同 同
見のがして

ふたくだり半わたす伺

御神酒も僕は呑となる

妾に切戸は問ひもせず

柿守りとして木にのこす

主従哀れむ關所守り

孝子と知つた西瓜番

又臍その減る里の母

花魁の無心聞く旦那

嬉しう背中叩かれる

醫者と毒婦は凄い笑み

仲居の橋になる咄なし

電話主だけ知る秘密

禿がぞつこ座をそれる

内證咄しをこそばがる

女將は凄い笑みもらす

見舞人謝絶する危篤

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

耳貸して

し之部

紳士ぶり 同
 同 同 同 同 同
 しつかりこ 同
 同 同 同 同 同
 同 同 同
 知らなんだ

七分で捨てる巻葉粉
 花にかけてる伊達めがね
 田舎言葉にねる附けて
 月給を聞けば氣の毒な
 宿の茶代に疲せ我慢
 拾らひ車も直切れぬ
 俄か儲けをした演師
 拘摸の乗り込む一等室
 辻相撲行司する丁稚
 けふこそ不二の富士を見た
 出た息きだけが酒臭い
 初日の關を浮雲がる
 下戸に任かして有る會計
 男勝りの後家譽る
 雨吐く竿に袖ぬらす

知らなんだ
 同 同 同 同 同 同
 しめて居る
 同 同 同 同 同 同
 しをらしい
 同 同 同 同 同

妹とも妹と聲も聲
 聞きや女房さん有るらしい
 俳號は聞くと初對面
 足元の茸連が取る
 怪我をした日の曆見る
 藁のうへから義理の親
 泣きよつた筈づ春の蟻
 指び切りや血汐よつた閨
 君いつの間にもんな媽
 肌身放なさぬ旅の金子
 石に八巻きさす二見
 明けて言われぬ繻田帶
 關の紫力き入れる
 銀行の門ごとに市がたつ
 持てぬ座蒲團引いて來る
 繼母と不知子が廻わす
 流石螢はやみの花

しをらしい

孫に引かるゝ老の弓

同

翌日吹く風は知らぬ花

同

唱歌を諷ふ乳母の膝さ

同

子も送り火に手を合す

同

野菊手向けて居る非人

同

さびし様ふてもよろし萩

静な事

たつた一夜で替わる春

同

花の芳野も冬木立

同

甲板へ出る客が多い

同

雨の櫻は又愉快

同

勅語朗讀する校長

同

伊勢は陽氣の神ながら

同

品んよふ麝香がをる閨

同

是が降ろごて宵いの冷

同

菴の茶煙りたつ紅葉

同

日の出の海が金屏風

辛抱せい

伯父の狂歌は石のうへ

同

今の苦勞は末で樂く

同

貧んを勵ます眞んの友

同

養子の親に恩が有る

同

苦界と言ふ字論す親

同

其疵づゆへの持參金

同

灸は其日の爲でない

同

婆々の色氣はわかつてる

同

藁火の脈くを笑む漁師

同

金庫の鍵ご去ぬ支配

同

呼び出し高ふ縞子まわし

同

繼母の無情土藏で泣く

同

手答へ重ふ光かる綱み

同

面會窓の涙拭く

同

田をにこらすと田螺の戸

同

月の輪の血が犬に附く

同

水際荒ろふ匆る綱み

しみたれめ

くさる程金子持ちながら

しみたれめ

呑んだ酒よりつけて酔ふ

同

又泣かされて来た丁稚

同

若いなりして親のすね

同

媽の死に跡ご身がもてぬ

ひ之部

光つてる

朝日まばゆき勅使門ん

同

御紋章薫る全世界

同

媽の氣性のみえる釜

同

鯨のまばゆい天主閣く

同

炎ん天干しの梅に鹽

同

よつぼご吸ふたらしい瓢

同

指先き曠な琴の會

同

利息で貸した金子でない

同

是で拂らるる稻の虫

同

由緒所の地から出た瓦

同

醫者の立關に鉄が有る

同

ひまらしい

同

翌日来てくれと言ふ染屋

同

宿屋が蒲團洗ふてる

同

伺の切れ目ご見える青樓

同

硯に見えて有る埃り

同

田葉粉の賣れが殖へて来る

同

冬籠りから髭のはす

同

米搗く音のする山家

同

辨財天に多い參詣

同

景の隨一乃松ごなる

同

吹きや飛ぶ様な浮御堂

同

世から鮎鮓珍重がる

同

植出し無難ん結構がる

同

水族館を見ても知る

同

他所にない魚水が産む

同

献上の鯉無疵撰る

同

日永しやけれご雪洞を見る花の宴

同

扱二人ん前出来ぬ職く

永日じやけれど人手のほしい田植時

同 貧乏してると世話敷ない

同 出入作事が嫁譏しる

同 下手はすくない茶摘賃

同 日を重さね

同 竹の筒から曠着買ふ

同 馴染む安堵に乳が張る

同 あこも爰こも適ての京

同 日光松島善光寺

同 敷きふすま張る日本紙

同 胸に徳得る儒者の僕

同 三つ組の盃い二見の圖

同 安の家賃にした老舗

同 雨に損んした興行主

同 人氣を繋ぐ初芝居

同 圍いの取れぬ大普請

同 藝題を替へる解れ太鼓

同 式場拜観許るされる

同 日延へして

同 同

同 結局く示談するつもり

同 興行の人氣出す張り紙

同 ひつぱり廻し

同 日和譽めてる悉皆屋

同 嫁は自慢の土川干

同 地價何ん倍を手放なさぬ

同 赤かかつた飴白ふする

同 繼子に着せる薄い綿

同 當て節しにゆり附ける咽と

同 付け馬の方が根んまける

同 注意しながら這入る井戸

同 江の島が伺ち案内する

同 本妻のゆめ凄ふ見る

同 螢と違ふ草の中

同 夜店の黄菊札附ける

同 更けた戸そつこ明ける嫁

同 妻の實意に酔ふ船長

同 夫まの機嫌んも蘭仕舞

同 久々じや

里の妹ご見る芝居
ごちら風かと花車も言ふ

も之部

同 もろいく

欺した奴つを汁で吸ふ

同

ごさんご轉けた盃佛

同

花は無常の惜し草

同

死ぬ今端まで高歩貸

ものくしい

許るさぬ親も縁んにする

同

くらがり同士が聲上げぬ

同

這出の下女が蛇笑ろふ

貰ろていや

下書につらい表装代

同

好かぬ納豆もてあます

同

まだ手を附けぬ持参金

同

下戸が鮎鮎風那引かす

同

好かぬお客に氣隨言ふ

同

やつぱり元の青樓に凝る

同 勿体ない

聾咄しだけ不孝すな

同

普きわたる日の恵ぐみ

同

親に汲まさぬ足盥らひ

同

恩給は皆積みたてる

同

影口叱かる妾の母

同

取つたかて柿またしふい

同

拾らへぬ米の中歩行く

同

社内の梅は影ふまぬ

同

子は親の汗水にせぬ

同

貧んゆへ親の壽を欺げく

同

煤別つに掃く御札箱

同

聞き人数減る切り語り

もじくご

尻りのこそばい意見聞く

同

手を握ぎられて小間使

同

不縁んの媒人数居越へる

同

けつかい近こふ朝戻り

同

氣不性病ひ問われてる

同

同

同

同

同

同

もじくご

同

同

同

最ふ一番

同

同

同

同

同

同

同

餅ついで

同

同

同

同

乳母にあかすもはづかしい

繼母の白眼む膳仕舞ふ

貸し人に古着出す介抱

債主の裾に寝る娘

見込み有る弟子稽古する

下手の横好き盤退かぬ

戀の地取りの指び相撲

迎かひ待たして能う見てる

助言ぐるめにむかつてかす

四縁くの夫ご無理からぬ

申し合せを取る角力

揉まれる弟子が熱心な

太さい割り木の埒ちがあく

長家中白が目をまわす

牛に施行する年の暮

退くなら退くと言へ床机

祝ひに蒔かす船なるし

同

もつともじや

同

同

同

同

同

同

同

同

門叩き

もくてき達し

同

同

最ふよいく

同

同

同

廓は陽氣に三味入れる

着たい覺へは母も有る

ミルク吸わせて男泣き

法名の有る冬の奥

洋行の費は恵む伯父

待たした春に乳を吞ます

余所へ遣る氣は産まぬ先き

兄嫁が瘦せ俱に泣く

堪忍の外かない不肩た

傘寺起こす燕子花

結んだ柳嬉しう見る

野營で圖面出す斥候

醫者より母の見たて笑む

すねる線香は繼がぬ客

蚊張釣る世話が菊で減る

にぶい返ん事に用さゝぬ

彼岸になるご暮らしよい

同 同
物も相談

汁る腕に伺通り越す
此上呑むご好きも毒く
媽の借り貸し出来まいか
債主が娘是悲と言ふ
いつそ里子の籍送くる
暖簾に令嬢添はしたい
貰うて下ださりや姉は遣る
妾の手切れは里が出す

せ之部

同 同 同 同 同
蟬が啼き
眞晝淋びしい華頂山
今ぬれた袖乾いてる
日曜の學校笑む近所
秋深こふ知る書院先
井戸へ下げ置く餘り酒
外と三荷でも仕たい母
二年明き腹ほしい嫁
せめてまあ
同

同 同 同
成長して

自首すゝめて伯母は泣く
月給一と晩ん寝さしたい
水盃を子も吞ます
芒が鹿の脊も隠くす
家の柱になる檜木
子子が人喰いに出る
國の御役にたてよ孫
御手植の松詠や菜こふ
部下の過失を冠る慈悲
俱に沈没する艦長
母は家庭に心練る
姪もうかく預からぬ
講和あつこふ身が重い
電話でしたらよい番號
鮫屋にも有る下毒丸
吐血後禁酒堅ふする
撰らんでのこす種瓢

千ついに

年嵩さに金子持たしこく

同

急病見舞が豫防する

同

嘘ばかりを喋べる婆は

同

白い名號に身を耻じる

同

大師の筆も落ちが有る

同

孝子の拾ろた金子糺す

脊がひくい

鹽風に皆洒落た松

同

皿ら駕百丁苦にもせず

同

鼻も同様でよい不容顔

同

萩にかんざしぬがれてる

同

御室のさくら見てる嫁

同

女牛の腹らに泥が付く

同

降らいても下駄履かしたい

同

菅公御手植有りし松

同

福壽艸餘程直が高い

同

筈は出馴れた舟の妻

せわしたい

陥落もする後家の城

同

元は藪からこんな聲

同

下た葉の落ぬ菊譽める

同

實母が禿見違へる

同

細い笥も音絶へぬ

同

治る發狂も嫁に有る

せくなく

得手して事を仕そんじる

同

龜の長生歌によむ

同

得手して下だり足仕もふ

同

生うは得がたし死は安し

同

よう地場見んとふみかぶる

同

爺に機嫌の折も有る

同

母の手並みに添ふ田植

同

家主も見込む程稼ぐ

同

媽に殻ら釜待たれてる

同

親の學資に汗絞る

同

無理な世帯も惚れのばす

同

鉄の刃減らす金子殖やす

精出して

同

せきしたたら

同

同

同

同

す之部

すなをな事

同

同

同

同

同

同

世の人並の人になる

親の田山もごり戻す

ぼんご二つに割れた影

夜ざとい嫁が又按る

よい中の垣気が廻わる

金柑んの数丁度合ふ

身爲の女將恨らみ合ふ

兄は譲りの土ほぜる

只めい／＼が孝に足る

里無いものごしてる嫁

流行遅れも着る娘

宵寝が母の氣に叶ふ

年子ながらも兄氣どり

藝の有る犬は餌に盡ぬ

手折らるゝ氣の有る娘

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

店の的とになる但馬

髪の毛迄も譽める嫁

朝戻りにも機嫌とる

小栗栖出るゝ胸が透く

白逆かさまに音頭臺

生きて此家は去なぬ媽

弱味憎の脊中紋だらけ

戦死者祀る忠魂碑

師を敬もふて鏡餅

金庫は家の飾りもの

田葉粉買足す居催促

二人り笑顔の手洗鉢

刺り毛拂ふてないしやくり

自慢ふり行くぬれ纏ひ

双た村の酔ふ水の月

盛り砂に置く清め鹽

待つた根だ張る險査跡

すんだく

同

同

ずらくこ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

次ぎの施行の札渡す

いざ御挨拶この媒人

世は凱旋の春迎ふ

飛行めでたい宙返り

下向は樂な砂入り

食客はのづう直り夫ま

望む揮毫に威は持たぬ

うた諷わすご吃でない

長家に居ても字はよい衆

筆蹟にまで有る元氣

遊女の索性筆に知る

御經よますと吃でない

正義の辯護淀んでぬ

染屋が改良まだしてぬ

孫も名の出る狸々講

機械にまける木挽き職

不筆減らす幼稚園

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

墨色見せる迷信家

男三人近衛兵

一町向ふに有た我怪

海は長等けし船の跡と

漁に行て見りやをもしろい

人に作らす田地買ふ

ふと味じ付いた薬喰い

病後百日太鼓打つ

二度の撰擧に家潰す

花魁一と晩ん京土産

うたれに來ても見てる瀧

葛籠明けさす虫の聲

いつこのふ減る橋の人

船の柱に露が浮く

媽か相撲好き今日も遣る

我が家へ近こふ去ぬ枯野

なる程橋は名のこをり

同 墨こぼし

羅漢書く絹雲にする
龍畫書く絹雲にする

京之部

同 京はよい處こ

政事勞かれの腦う休すめ

同

行脚が肥す歌ぶくろ

同

寺名も金んご銀んご有る

同

鹽ふみの子を見違へる

同

姉けなりがる越後獅々

同

長ごふ都であつた筈づ

同

氣に無い奢りして戻る

同

奉公したがる知恵貰らひ

同

名所古跡に見飽させぬ

同

赤かいへ、着て魚喰べる

同

着倒れなど、言ふけれご

同

清鷹卿が見たてた地

同

秋山の香が高こ賣れる

同

半季で剥けた澁の皮わ

同

水と女郎とは勝ぐれてる

同

猛者引きしても喰ていける

同

昇格く祭で又踊る

同

溢れ拾ろてる伏見町

同

眼に千金は御忌小袖

同

顔見せ派手に眼をおぼふ

同

動物園も花盛り

同

昨ふはひがしけふは西

同

都跡りは見飽させぬ

同

御所拜觀が逗留する

記念 冠句菊の香